和歌山市内遺跡発掘調査概報

－ 平成15年度 －

和坂南垣内古墳群発掘調査

2005

和歌山市教育委員会

序　　文

和歌山市は，紀伊山地を源に西流して紀伊水道に達する紀ノ川が形成した肥沃な和歌山平野の河口部に位置しています。

紀ノ川を中心として古代より文化の栄えた場所であり，全国的にも著名な太田・黒田遺跡や岩橋千塚古墳群をはじめとして，およそ400ヶ所にものぼる遺跡が確認されています。

それらの遺跡は，私達の祖先の残した貴重な文化遺産でありますが，近年は遺跡内での開発行為が盛んになり，遺跡が壊滅の危機にさらされることも少なくありません。

そうした開発に対処するため，平成7年度から国庫補助金・県費補助金を得て，主に個人による開発を対象にした市内遺跡の発掘調査等の事業を実施してまいりました。

本書には，平成15年度に実施した和坂南垣内古墳群の発掘調査の成果を収めています。ここに報告する調査概要が活用され，地域の歴史解明に少しでも寄与されれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました関係者各位及び土地所有者の皆様に深く感謝いたします。

平成17年3月31日

和歌山市教育委員会

教育長　**空　　光　昭**

例　言

1　本書は、平成15年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2　調査対象経費の総額は520万円であり、国１／２、県１／８、市３／８の補助率である。

3　本年度の調査対象は下記のとおりである

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
和坂南垣内古墳群発掘調査	和歌山市禰宜1542番地内	平成15年12月５日～平成16年３月12日	6000㎡	川口修実
平成15年度出土遺物整理事業		平成16年２月９日～平成16年３月11日		奥村　薫

4　発掘調査に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長	山口喜一郎	
文化振興課長	榎本　直樹	
文化財班長	大野左千夫(～平成15年９月16日)	
	榎本　邦雄(平成15年９月16日～)	
学芸員	益田　雅司	

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長	宇治田克夫	
事務局長	土岐　　朗	
総務課長	久保　雅英	
事務員	山口　美二	（文化財事務担当）
学芸員	川口　修実	（発掘調査担当）

5　報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長	山口喜一郎(～平成16年７月３日)	
	空　　光昭(平成16年７月４日～)	
文化振興課長	寺田　　哲	
文化財班長	高橋　克伸	
学芸員	益田　雅司	

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長	宇治田克夫	
事務局長	土岐　　朗	
総務課長	久保　雅英	
事務員	山口　美二	（文化財事務担当）
学芸員	川口　修実	（報告書担当） （～平成16年９月30日）

6　本書のうち発掘調査の概要部分については調査担当者である川口修実が担当し、本書の構成については益田雅司が行った。

7　写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

8　出土遺物整理事業については、太田・黒田遺跡第45・52次発掘調査出土遺物のうち、未洗浄遺物コンテナ50箱分の洗浄作業を対象として実施した。

9　本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1. 調査の契機と経過 ・・・ 1
2. 位置と環境 ・・・ 2
3. 現在に至る経過 ・・・ 4
(1) 和坂南垣内古墳群に関する既往の記述について ・・・ 4
(2) 過去の掘削について ・・・ 4
(3) 1号墳既出土の土器類について ・・・ 4
4. 調査の方法と経過 ・・・ 6
(1) 調査の方法 ・・・ 6
(2) 調査の概要 ・・・ 7
5. 墳丘と周辺地形 ・・・ 8
6. 遺構 ・・・ 11
(1) 第1区 ・・・ 11
(2) 第2区 ・・・ 20
(3) 第3区 ・・・ 20
7. 遺物 ・・・ 23
(1) 1号墳出土の土器 ・・・ 23
(2) 2号墳出土の土器 ・・・ 25
(3) 土製品 ・・・ 26
(4) 金属製品 ・・・ 26
(5) ガラス製品 ・・・ 27
8. まとめ ・・・ 28
(1) 和坂南垣内古墳群の調査成果と評価について ・・・ 28
(2) 1号墳横穴式石室の構造について ・・・ 30
報告書抄録 ・・・ 32

図版目次

図版1　遺跡　和坂南垣内古墳群遠景(北から)、和坂南垣内古墳群遠景(東から)、調査前の古墳群近景(北東から)
図版2　遺跡　調査前の古墳群近景(南西から)、1号墳調査前の状況(南から)、3号墳調査前の状況(北から)
図版3　遺跡　樹木伐採後の古墳群近景(北東から)、樹木伐採後の古墳群近景(南西から)
図版4　遺構　1・2号墳(南西から)、1号墳(北から)、1号墳(西から)
図版5　遺構　1号墳墳頂部(南から)、2号墳から1号墳を望む(南から)、1号墳から2号墳を望む(北から)
図版6　遺構　2号墳墳頂部(北東から)、2号墳(西から)、2号墳(南西から)
図版7　遺構　3・4号墳(北から)、3・4号墳(南から)
図版8　遺構　3号墳(東から)、4号墳(北東から)、4号墳(南西から)

図版 9　遺構　第 1 区調査前の状況(西から)、第 1 区樹木伐採後の状況(西から)、第 1 区横穴式石室上部の巨石(西から)

図版 10　遺構　第 1 区樹木伐採後の状況(北から)、第 1 区樹木伐採後の状況(東から)、第 1 区巨石撤去後の状況(東から)

図版 11　遺構　第 1 区全景(西から)、第 1 区全景(東から)

図版 12　遺構　第 1 区横穴式石室玄室(北から)、第 1 区横穴式石室奥壁・棺台(西から)

図版 13　遺構　第 1 区横穴式石室玄室土層堆積状況(西から)、第 1 区横穴式石室玄室北側壁(南から)、第 1 区横穴式石室玄室南側壁(北から)

図版 14　遺構　第 1 区横穴式石室棺台(西から)、第 1 区横穴式石室玄室南側壁棺障基部(北から)、第 1 区横穴式石室玄室床面断割り状況(西から)

図版 15　遺構　第 1 区横穴式石室玄室排水溝(東から)、第 1 区横穴式石室玄室床面の円礫(東から)、第 1 区横穴式石室玄室北側壁基底石の状況(南から)

図版 16　遺構　第 1 区横穴式石室玄室から羨道部を望む(東から)、第 1 区横穴式石室玄室前道部(西から)

図版 17　遺構　第 1 区横穴式石室玄室前道部土層堆積状況(南から)、第 1 区横穴式石室玄室前道部南側壁(北から)、第 1 区横穴式石室玄室前道部閉塞石(西から)

図版 18　遺構　第 1 区横穴式石室羨道部(東から)、第 1 区横穴式石室羨門部・墓道(東から)

図版 19　遺構　第 1 区横穴式石室羨道部・羨門部北側壁(南から)、第 1 区横穴式石室羨道部・羨門部南側壁(北から)

図版 20　遺構　第 1 区横穴式石室羨道部土層堆積状況(東から)、第 1 区横穴式石室羨門部土層堆積状況(西から)、第 1 区横穴式石室羨道部遺物出土状況(西から)

図版 21　遺構　第 1 区横穴式石室羨道部遺物出土状況(南から)、第 1 区横穴式石室羨道部遺物出土状況(西から)、第 1 区横穴式石室羨道部北側壁(南東から)

図版 22　遺構　第 1 区横穴式石室羨道部南側壁(北東から)、第 1 区横穴式石室羨門部北側壁(南から)、第 1 区横穴式石室羨門部南側壁(北から)

図版 23　遺構　第 1 区横穴式石室羨道部閉塞石(南から)、第 1 区横穴式石室羨道部床面断割り状況・排水溝(東から)、第 1 区横穴式石室羨道部北側壁基底石の状況(南から)

図版 24　遺構　第 1 区横穴式石室墓道検出状況(西から)、第 1 区横穴式石室墓道検出状況(南から)、第 1 区横穴式石室墓道(東から)

図版 25　遺構　第 2 区全景(北から)、第 2 区全景(南から)

図版 26　遺構　第 2 区 1 号墳墳丘検出状況(西から)、第 2 区 1 号墳墳丘・岩盤検出状況(西から)、第 2 区 2 号墳墳丘検出状況(北東から)

図版 27　遺構　第 3 区全景(北東から)、第 3 区全景(南から)

図版 28　遺構　第 3 区横穴式石室検出状況(南西から)、第 3 区横穴式石室検出状況(北東から)、第 3 区横穴式石室玄室前道基石・玄室床面(南東から)

図版 29　遺構　第 3 区横穴式石室羨道部東側壁・岩盤検出状況(北西から)、第 3 区土層堆積状況 1 (西から)、第 3 区土層堆積状況 2 (西から)

図版 30　遺物　1 号墳既出土遺物、1 号墳(第 1 区)出土遺物

図版 31　遺物　1 号墳(第 1 区)出土遺物、2 号墳(第 3 区)出土遺物

図版 32　遺物　2 号墳(第 3 区)出土遺物、1 号墳(第 1 区)出土遺物

1．調査の契機と経過

和坂南垣内古墳群は紀ノ川の南岸、岩橋山塊東端部から北方に派生する丘陵端部、標高約37ｍに立地する遺跡である。本遺跡の位置する丘陵部は、低い鞍部によって後背の丘陵とは分離しており、北側の平野部に突出した独立丘陵状の地形をなしている(第１図)。和坂南垣内古墳群は現在まで遺跡として周知されておらず、地域住民の通知によって新規に確認された遺跡である。

今回の調査は古墳群の最も北側に位置する１号墳横穴式石室の天井石に使用されたとみられる巨石が石室上部に落ち込み(図版９)、側壁が崩壊する危険があったため巨石の撤去と石室内部の調査を行い、遺構の保存を図ることを主目的として和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施したものである。この他、新発見の遺跡としてその基礎的な情報を確認するために、古墳の位置する丘陵部全域の測量調査と小規模な発掘調査を行った。その結果４基の古墳を確認し、北側に位置するものから１～４号墳とし、調査にあたった。なお、調査期間中における遺跡名称は、地域住民による呼称を踏襲し、和坂古墳群と仮称してこれを用いた。調査は和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて行った。現地調査の期間は、平成15年12月５日から平成16年３月12日までの期間を要した。また調査の結果、１号墳の横穴式石室については、玄室の仕切石が主軸と平行する形で構築されており、県内では稀少な事例であることが判明したために、２月21日に現地説明会による一般公開を行い、約140名の参加者を得た(写真１)。

写真１　現地説明会風景

第１図　調査位置図

2．位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面する。本市は和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に位置する。和坂南垣内古墳群(１)は、紀ノ川南岸の岩橋山塊から北に派生する丘陵上に立地する遺跡である。

次に周辺の遺跡について概観すると、旧石器時代の遺跡としては和歌山市と貴志川町の境にひろがる大池遺跡(32)があげられ、ナイフ形石器や角錐状石器、尖頭器など多量の石器類が発見されており、当該期においては県下でも主要な遺跡の一つとして知られている。

縄文時代の遺跡としては、岩橋山塊の周辺部に禰宜貝塚(２)、吉礼貝塚(７)、鳴神貝塚(17)が、紀ノ川北岸に川辺遺跡(23)があり、鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された貝塚として著名である。禰宜貝塚は、発掘調査により前期を主体とした南北２本の貝層が平行して存在することが明らかとなっており、貝層に挟まれた空間に集落の中心があると考えられている。

弥生時代では、紀ノ川南岸の井辺遺跡(14)が中・後期の集落跡であり、後期の列状に並んだ２本の土器列が検出され、奥山田遺跡(24)では中期末から後期前半の竪穴住居、土坑、丘陵裾部を取り巻く濠状遺構が確認されている。紀ノ川北岸では西田井遺跡(20)、北田井遺跡(21)、宇田森遺跡(22)、川辺遺跡(23)が中期以降の大規模な集落跡として知られている。

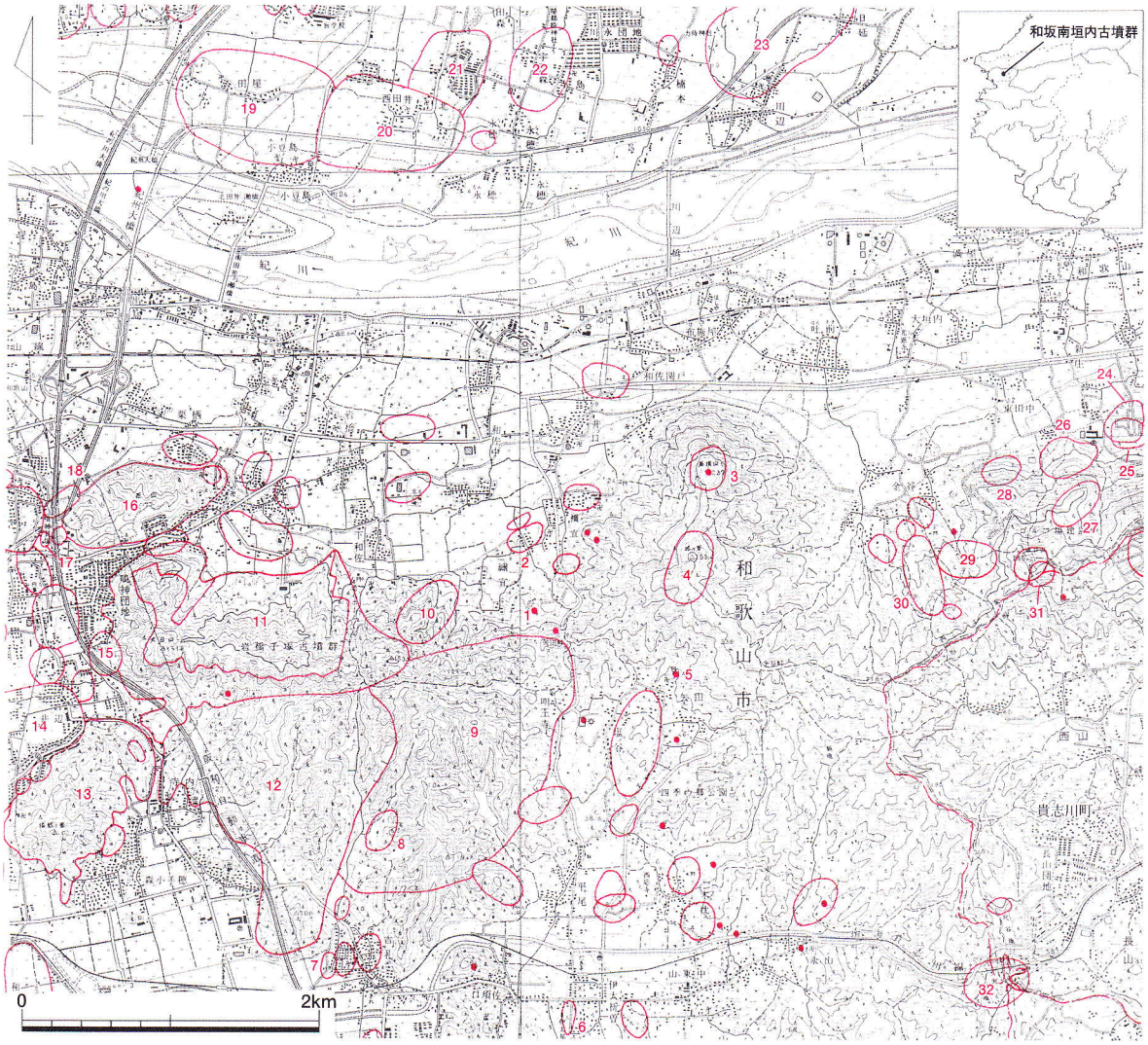
古墳時代の集落跡は、岩橋山塊の西側に大日山Ⅰ遺跡(15)や音浦遺跡(18)などがあり、紀ノ川北岸では弥生時代に引き続き田屋遺跡(19)、西田井遺跡、北田井遺跡、川辺遺跡など大規模な集落跡が存在している。また、音浦遺跡、田屋遺跡では韓式系の土器が出土している。

古墳は前期末に花山丘陵上に花山古墳群(16)が築造され、中期後半から後期には岩橋山塊の丘陵上に岩橋千塚古墳群(11)が古墳築造の盛期を迎える。その周辺部には伊太祈曽神社古墳群(６)、山東古墳群(９)、和佐古墳群(10)、寺内古墳群(12)など後期の群集墳が密集し、本遺跡もその一つとして位置づけられる。この地域では伊太祈曽神社１号墳や山東22号墳、和佐７号墳など石棚・石梁を備えた岩橋千塚古墳群と同形態の石室が構築されている。これに対し、本遺跡の東に位置する高積山は古墳の空白地帯であり、その東の鳩羽山塊には奥山田古墳群(25)、寺山古墳群(26)、宮山古墳群(27)、東国山古墳群(28)、小倉古墳群(29)、明楽古墳群(30)、七ツ塚古墳群(31)など小規模な後期の古墳群が集中する。東国山古墳群は後期前半の古墳群で、調査が行われた１号墳では男女２体を合葬した竪穴式石室が検出され、奥山田古墳群では双室墳や小竪穴式石室、７世紀代に築造された無袖式の横穴式石室墳など７基の古墳が確認された他、滑石製紡錘車と須恵器を納めた祭祀土坑が検出されている。寺山古墳群は、蛇紋岩の大石を用いて構築したいわゆる穹窿式の横穴式石室が構築されており、渡来系集団との関連が指摘されている。これら鳩羽山塊の群集墳は、岩橋千塚古墳群と類似する形態の石室が構築されているが、玄門部に立柱石をもつものが多く、寺山古墳群など異形の石室が存在することから、高積山を境として石室形態が異なる状況が指摘できる。また、生産遺跡としては吉礼砂羅谷窯跡(８)が奈良時代まで続く窯跡群であり、須恵器・埴輪を併焼した窯跡として知られている。

古代では、大日山Ⅰ遺跡や奥山田遺跡で掘立柱建物が検出されている。奥山田遺跡では平安時代後期以降の瓦類が出土しており、寺院の存在が推定される他、緑釉陶器・灰釉陶器・初期貿易陶磁器

などが出土している。また、川辺遺跡では南海道の支線とみられる道路状遺構が検出されている他、寺内古墳群内からは平安時代の火葬墓が１基検出されている。

中世の遺跡では、本遺跡の東に位置する高積山の山頂部に総数10,470枚の埋納銭が発見された高積山遺跡（３）があり、底面・四壁に平瓦を積んだ中に納めた構造とみられる。また、その南方には中世の山城である城ヶ峯城跡（４）や埋納状況は不明ながら瓦製経筒、和鏡、合子、青磁、瓦器皿など多くの遺物が出土した明王寺経塚（５）があり、本遺跡の東側に推定される熊野古道沿いに遺跡の分布が集中することが指摘できる。この他、奥山田遺跡では12棟以上の掘立柱建物や鍛冶炉跡が検出されており、滑石製温石や石鍋の未製品などが出土している。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	**和坂南垣内古墳群**	古墳	9	山東古墳群	古墳	17	鳴神貝塚	縄文～弥生	25	奥山田古墳群	古墳
2	禰宜貝塚	縄文	10	和佐古墳群	古墳	18	音浦遺跡	古墳	26	寺山古墳群	古墳
3	高積山遺跡	中世	11	岩橋千塚古墳群	古墳	19	田屋遺跡	弥生～近世	27	宮山古墳群	古墳
4	城ヶ峯城跡	中世	12	寺内古墳群	古墳	20	西田井遺跡	弥生～中世	28	東国山古墳群	古墳
5	明王寺経塚	中世	13	井辺前山古墳群	古墳	21	北田井遺跡	弥生～古墳	29	小倉古墳群	古墳
6	伊太祈曽神社古墳群	古墳	14	井辺遺跡	弥生	22	宇田森遺跡	弥生	30	明楽古墳群	古墳
7	吉礼貝塚	縄文	15	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	23	川辺遺跡	縄文～近世	31	七ツ塚古墳群	古墳
8	吉礼砂羅谷窯跡	古墳～奈良	16	花山古墳群	古墳	24	奥山田遺跡	弥生～中世	32	大池遺跡	旧石器～縄文

第２図　和坂南垣内古墳群周辺の遺跡分布図

3．現在に至る経過

（1）和坂南垣内古墳群に関連する既往の記述について

和坂南垣内古墳群は、地元住民にその存在は知られていたが、一般には周知の遺跡ではないため、本遺跡に関連する記述や報告はほとんどない。しかし、地元和佐地域の歴史について記した郷土誌、『和佐五千年史』には唯一、本古墳群に関連する記述がみられる。以下に、関連部分を抜粋する。

「実盛塚　禰宜南垣内矢田峠の西方にある。源平の昔、斉藤実盛という武士がいたがこの人の墓ではない。サネモリは早苗降より転語せるもので早苗降明神は稲穀を守護する神で、稲の害虫を追い払う意味。虫送りの時、たいまつを燃やしながらここから出発したものである。」

この記述から本古墳群は地元では実盛塚と呼称され、塚という認識はあったことが窺えるが、古墳の頁に関連する記述はみられないことから、一般には古墳という認識は存在しなかったと考えられる。また、4号墳上部には江戸時代の墓地が造営されており、塚という認識はこれらを指していた可能性がある。

【引用文献】
秦野南嶽『和佐五千年史』 1966年

（2）過去の掘削について

1号墳の調査前の状況は、盗掘坑内において横穴式石室の壁面の一部が露呈していたことから、採石及び盗掘行為が行われていることが窺われた。この点について、1号墳横穴式石室は明治末期から大正初期頃にかけて地元住民数名による盗掘行為が行われ、鉄刀や耳環、土器類などが掘り出されたことが地元では言い伝えられており、その際出土した鉄刀や耳環などは古物商へ売却されたが、地元警察の目に留まることになり、土器の一部は埋め戻されたという。

その後、1970年代には、古墳上部に植樹した樹木の育成が思わしくないことを不信に感じた土地所有者によって、玄室内部を中心に掘削が行われている。この時点での掘削前の状況は、横穴式石室の石材等は全く露呈しておらず、完全に埋没していたということである。この際、右袖付近から一箇所にまとまって土器類(第3図)が出土しており、現在まで土地所有者により保管されている。この土器類は明治末期から大正初期の盗掘に際して埋め戻された土器類であることが、盗掘行為に参加した本人によって確認されている。また、掘削時の玄室内の状況としては、発掘調査で検出した棺台の一部や仕切石も確認されており、南側の仕切石については当初3つの石材を連結させていたが、1石を除き石垣用材として取り上げられたということである。

（3）1号墳既出土の土器類について（第3図、図版30）

本報告にあたり、土地所有者のご好意によって1号墳既出土の土器類について、実測調査を行う機会を得たので、以下に報告を行う。

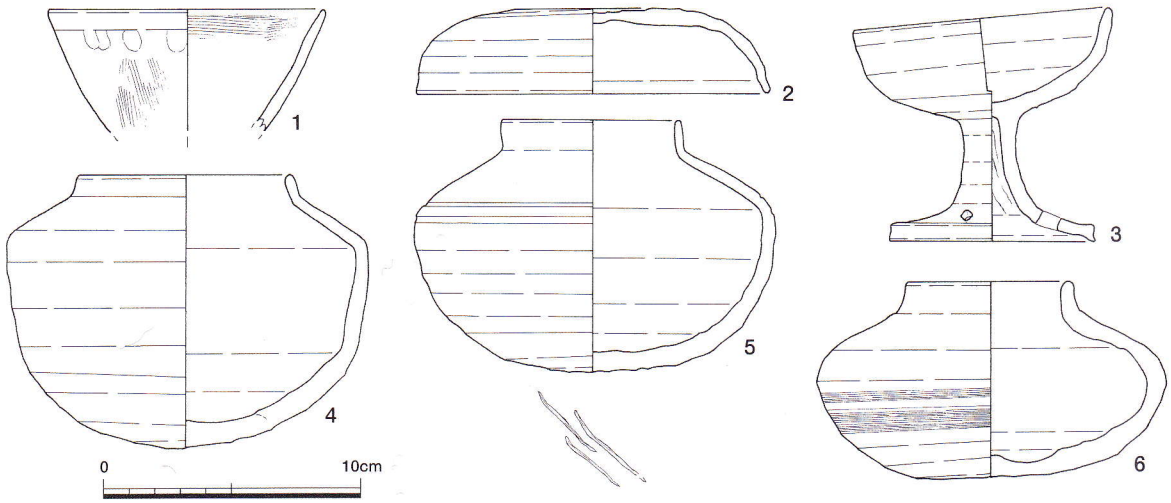
1は、土師器の高杯杯部とみられる個体であり、口径10.8cmを測る。ナデと指オサエによって成形した後、外面はタテハケによって調整し、口縁部にヨコナデを施す。内面はヨコ方向のハケを施した後、ヨコナデ調整を行う。

2～6は、須恵器である。2は口径13.8cm、器高3.4cmを測る杯蓋である。口縁部と天井部を画する稜はなく、口縁端部も丸くおさめている。天井部のヘラケズリ調整は、天井部全体の2/3程度であり、比較的丁寧に施されている。天井部の形態は中央部が周囲に比べ深く削り込まれているために器壁が薄くなっており、中央部が窪んでいる。

3は口径10.0cm、器高9.2cm、脚部径8.0cmを測る低脚の高杯である。杯部は椀状の形態を呈するもので、脚部に対して傾いて接合されており、杯部下半はヘラケズリによって調整されている。脚部は「ハ」の字状にひらき、裾部で下方に屈曲し端部は垂下して凹面をなしている。裾近くには「◇」形のスカシ孔が対向する位置に4箇所穿たれているが、切り口面はきれいな面を呈しておらず、粗雑であることから、かなりの乾燥段階に穿たれたものとみられる。

4～6は有蓋の短頸壺であるが、セットをなす蓋は遺存していない。4は口径8.2cm、器高10.7cmを測り、やや長胴ぎみの体部に短く内傾する口縁部を有するものである。口縁部は薄く丸い形態を呈し、底部は丸底に仕上げられている。体部中位には、成形段階の指オサエの痕跡を留めており、体部下位から底部にかけてはヘラケズリ調整が施されている。内面はロクロナデであるが、底部のみ成形時の指オサエと不定方向のナデによる痕跡が認められる。5は口径7.0cm、器高10.0cmを測り、丸みのある扁平な体部に、薄くつくられた直立する口縁部を有するものである。外面の肩部と体部の境には2条の沈線を施し、体部にはロクロ目の痕跡を残す。底部外面の中央部には、ヘラ先によって直線的に刻まれた3条のヘラ記号がみられる。また、口縁部・体部中位の一部を除くほぼ前面に自然釉の痕跡を留めている。6は口径6.5cm、器高7.7cmを測り、扁平な体部形態を呈するものである。口縁部は短く直立し、丸く仕上げており、底部はやや平底ぎみである。全体的に器壁が厚くつくられており、外面の体部中位下にはカキメ調整を施す。内面は底部にロクロ目が著しく、特に底部中央は突起状に隆起している。

2～6の須恵器については、焼成はいずれも堅緻で、胎土中には結晶片岩・石英・長石を含むことから、在地産のものと考えられる。また、ロクロの回転方向については、いずれの個体も右回りである。



第3図　1号墳既出土の遺物実測図

4．調査の方法と経過

(1)調査の方法

調査対象地である丘陵部は、1号墳の周辺を除き、ほぼ全域を果樹園として開墾されているが、ここ数年来放置されていたことにより樹木・草が繁茂していたために視界不良で、各古墳の位置・形状を肉眼で観察することが困難な状況であった(図版1・2)。そこで調査はまず、1号墳横穴式石室周辺の巨木及び竹の伐採、丘陵全体の主要な樹木の伐採及び除草作業の後、1号墳石室上部に落ち込んだ巨石の撤去を行った。巨石の撤去については、油圧ジャッキを用いて少しずつ上方に移動させ、この作業を繰り返して墳頂部高まで持ち上げた後、石室北側へ水平移動する方法をとった(写真2・3)。

写真2　石材撤去作業風景1

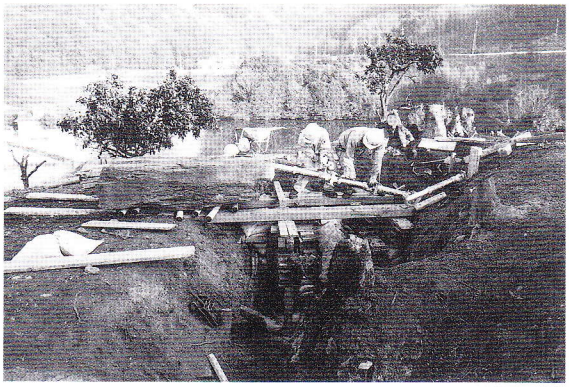
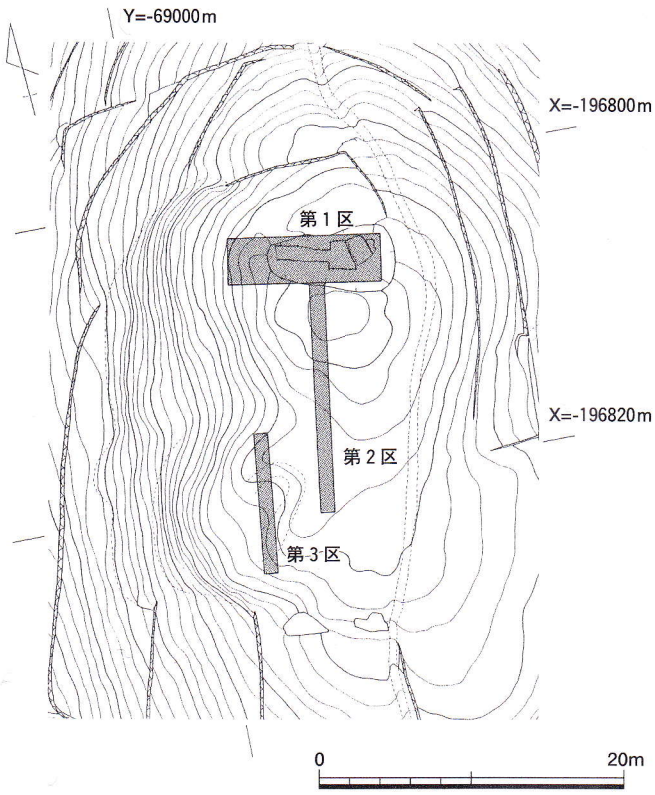


写真3　石材撤去作業風景2

発掘調査については、4基の古墳の内、1・2号墳を発掘調査対象とし、3箇所の調査区を設定し、第1～3区とした(第4図)。まず第1区は、1号墳横穴式石室の玄室主軸を基準に幅3m、長さ10mの調査区とし、第2区は1・2号墳が当初同一古墳の可能性が考えられたため、第1区と直交する形で1号墳から2号墳の墳丘上に幅1m、長さ15mの調査区を設定した。さらに2号墳墳頂部において浅い落ち込みが認められ、これが主体部の崩落したものと考えられたために、第2区と平行するように幅1m、長さ9mの調査区を設定した。3箇所の調査区による合計発掘調査面積は、約54㎡である。調査後の人力による埋め戻しについては、1・2号墳の石室部分を砂で充填した土嚢袋で保護し、その上部を掘削土によって覆い、これを行った。



第4図　調査地区割図

図面による記録は、地形測量図については国土座標軸(日本測地系)を基準として、等高線25cm間隔で1/100の縮尺を用いた

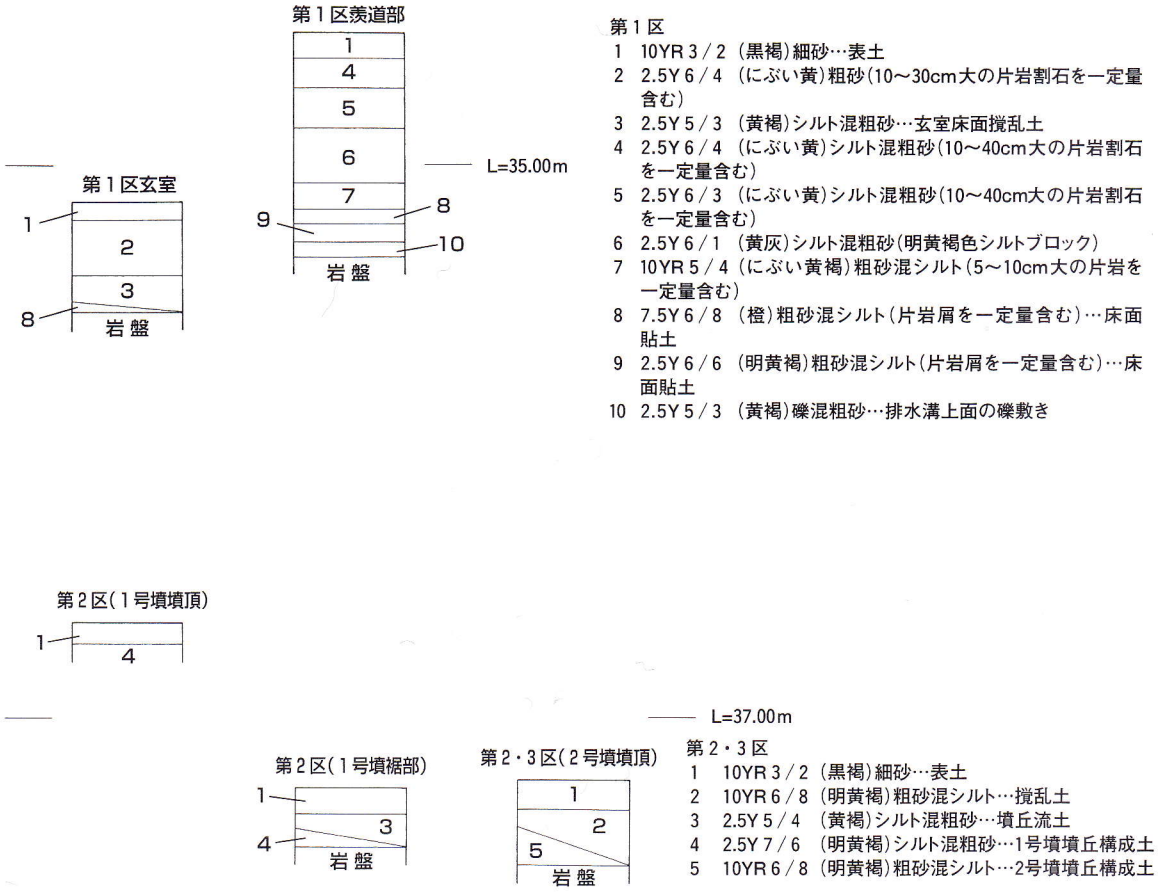
平板測量を行った。遺構全体平面図・土層断面図は1/20の縮尺、横穴式石室の平面・立面図は1/10の縮尺で手実測を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

(2)調査の概要

調査区の基本層序については、第5図に示したとおりである。

まず第1区については、玄室と羨道部において堆積土層が大きく異なっている。玄室から玄室前道部については、表土(第1層)下に近年の盗掘や撹乱において乱された際の土層(第2・3層)が堆積する。第2層は石室の壁体を多量に含む層であり、これは盗掘時に掘削した土を埋め戻した土層とみられる。第3層は玄室床面の撹乱土層であり、本来床面に敷かれていた円礫を多量に包含している。第3層下面には断ち割り箇所において、原位置を保つ礫敷きの床面が確認されたが、その下層は標高約34.20mで岩盤層に達する。羨道部は近年の盗掘を免れているために、安定した堆積土層が確認された。まず表土下には、にぶい黄色及び、黄褐色のシルト混粗砂層が3単位(第4～6層)堆積しているが、これらの各土層からは中世土師器の皿や瓦器椀・皿が完形で出土したことから、中世前期の堆積層と考えられる。第7層は20～30cmの厚さで堆積する層であり、上下層との対応関係から、古墳築造後から中世前期までに堆積した流入土と考えられる。第8～10層は床面構成土であり、標高約34.50mで岩盤層に達する。

次に第2・3区の層序については、墳丘構成土が大きく流出している状況であり、1号墳墳頂部(第2区西端)では表土(第1層)直下に墳丘構成土である明黄褐色のシルト混砂層(第4層)が検出された。



第1区
1 10YR3/2 (黒褐)細砂…表土
2 2.5Y6/4 (にぶい黄)粗砂(10～30cm大の片岩割石を一定量含む)
3 2.5Y5/3 (黄褐)シルト混粗砂…玄室床面撹乱土
4 2.5Y6/4 (にぶい黄)シルト混粗砂(10～40cm大の片岩割石を一定量含む)
5 2.5Y6/3 (にぶい黄)シルト混粗砂(10～40cm大の片岩割石を一定量含む)
6 2.5Y6/1 (黄灰)シルト混粗砂(明黄褐色シルトブロック)
7 10YR5/4 (にぶい黄褐)粗砂混シルト(5～10cm大の片岩を一定量含む)
8 7.5Y6/8 (橙)粗砂混シルト(片岩屑を一定量含む)…床面貼土
9 2.5Y6/6 (明黄褐)粗砂混シルト(片岩屑を一定量含む)…床面貼土
10 2.5Y5/3 (黄褐)礫混粗砂…排水溝上面の礫敷き

第2・3区
1 10YR3/2 (黒褐)細砂…表土
2 10YR6/8 (明黄褐)粗砂混シルト…撹乱土
3 2.5Y5/4 (黄褐)シルト混粗砂…墳丘流土
4 2.5Y7/6 (明黄褐)シルト混粗砂…1号墳墳丘構成土
5 10YR6/8 (明黄褐)粗砂混シルト…2号墳墳丘構成土

第5図　調査地土層柱状模式図

1号墳墳丘裾部付近では、表土下に墳丘流土である黄褐色のシルト混砂層(第3層)が堆積しているが、その下層では墳丘構成土(第4層)あるいは岩盤層となる。2号墳墳頂部(第2区南側及び第3区)については、表土下に墳丘構成土である明黄褐色粗砂混シルト層に表土が混じった撹乱土(第2層)が堆積しており、その下面は墳丘構成土(第5層)あるいは岩盤層となる。

遺構は、第5層上面において盗掘坑とみられる土坑状の落ち込みを検出した。

5．墳丘と周辺地形（第6図）

和坂南垣内古墳群の位置する丘陵部は、前述したように低い鞍部によって後背の丘陵とは隔たった独立丘陵状の地形をなしており、また丘陵が北側に突出しているために丘陵頂部からの眺望が非常に良く、景勝の地に位置していると言える(図版1・3)。

丘陵部は1号墳周辺を除き、ほぼ全域が果樹園や畑として利用されており、3号墳南側のみが竹林となっている。このため、丘陵の東西両斜面には果樹園造成に伴う石垣が6段程度築かれており、改変を受けている。3号墳の西側は土地境の土手が巡っており、この土手内部にあたる丘陵南西部は丘陵斜面を大きく削平して石垣を構築しており、特に改変が著しい。北・西側の丘陵裾部は、鶏舎建築のため、北東部についても道路建設により削平され、崖状を呈している。

古墳は丘陵部の尾根筋に築造されており、最も北側の頂部に1号墳、その南西隣に2号墳が、1・2号墳から南側に下った尾根上に3号墳、その南東隣に4号墳が位置している。以下、1～4号墳の各古墳について記述を行う。

1号墳の周辺は北・東側が果樹園となっており、東側は盛土によって平地化されているために旧状を留めていないが、古墳の西側は大きな改変が認められず、遺存状態は良好である(図版4)。古墳の北・南側斜面は削平や墳丘の流出によって平坦化しており、特に南側の斜面の勾配は非常に緩やかである(墳丘断面A-A′ライン)。墳頂部には長さ8.2m、最大幅4.2mを測り、石室の主軸に沿って掘削された盗掘坑があり、坑内において石室壁面の一部が露呈している状況であった。また、玄室上部には、本来天井石に使用されたとみられる長さ2.0m、幅1.3m、厚さ50cm を測る巨石が落ち込んでおり、わずかに壁面に架かっている状況であった(図版9)。古墳を巡る等高線は、墳頂部や西側の墳丘において円形を呈することから墳形については円墳と考えられる。古墳西側は墳丘土がかなり流出し、急峻な斜面をなしている(墳丘断面B-B′ライン)ために墳丘裾部を示す明確な傾斜変換点や段築の痕跡は確認できないが、玄室の床面が34.20mであることから、この付近に墳丘裾部を求め、玄室中央を古墳の中心と想定し復元すると直径約24m、高さ3.2m以上の大型円墳となる。葺石や列石など古墳に伴う外部施設は認められないが、古墳北西の墳丘流土内から須恵器器台(第14図13)が1点表採された。

2号墳は1号墳に隣接して位置しており、尾根筋でもやや西側に寄って築造されている。古墳の周囲は東・南側が果樹園となっており、特に東側は1号墳同様盛土によって平地化され、大きく改変されている(墳丘断面C-C′ライン)が、西側は大きな改変は認められず、墳丘の遺存状態は良い(図版5・6)。墳頂部は大きく削平され、平坦化しているが、その西側において主体部の崩落した痕跡とみられる浅い

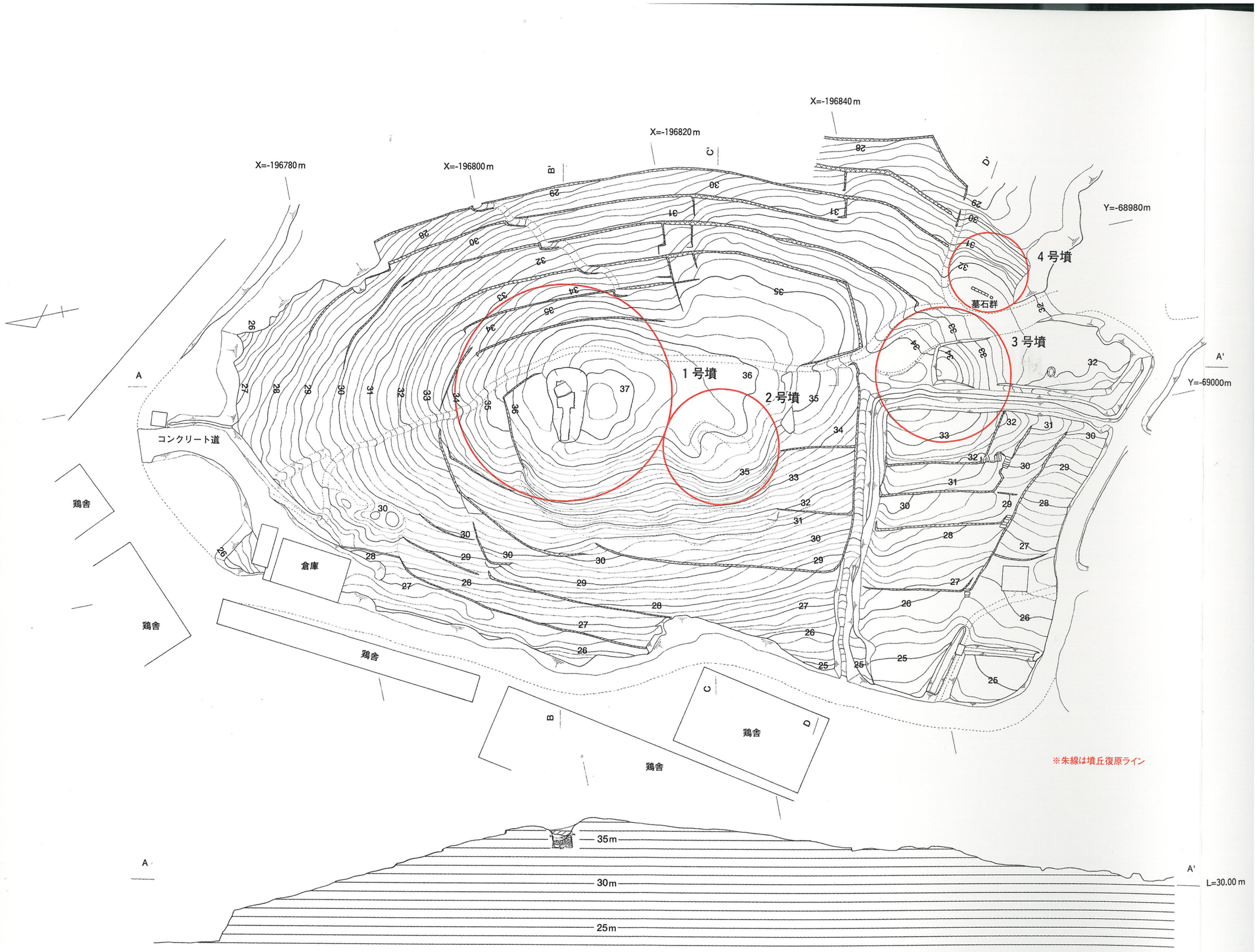
層）が堆積している
区南側及び第３区）
た撹乱土（第２層）

の丘陵とは隔たった
の眺望が非常に良く、

壌南側のみが竹林と
かれており、改変を
南西部は丘陵斜面
鶏舎建築のため、

こ２号墳が、１・２
、１～４号墳の各

ているために旧状を
（図版４）。古墳の
は非常に緩やかで
主軸に沿って掘削
た、玄室上部には、
落ち込んでおり、
部や西側の墳丘に
かなり流出し、急峻
段築の痕跡は確認
中央を古墳の中心
古墳に伴う外部施設
した。
いる。古墳の周囲
大きく改変されて
良い（図版５・６）。
痕跡とみられる浅い



第６図　墳丘及び周辺地形測量図

A'

=-69000m

B'

L=30.00m

35m

30m

25m

B

C'

L=30.00m

35m

30m

25m

C

D'

L=30.00m

30m

25m

D

A'

L=30.00 m

0

20m

「U」字形の落ち込みが認められた。古墳を巡る等高線は、墳丘西側においてきれいな円形を呈することから、墳形については円墳と考えられる。規模については、標高32.75m付近に傾斜変換点が認められることから復元すると、直径約12m、高さ3.0m以上と判断できる。また、古墳南西の墳丘上から裾部にかけて、須恵器杯蓋(第15図21・22)の破片4点が表採された。

3号墳は、2号墳の南東約11mの地点に築造されている。古墳上部は大きく削平されて平坦化しており(墳丘断面A-A′・D-D′ライン)、西側は土地境の土手や果樹園の造成により改変されている(図版7・8)。このため旧状を留めている範囲は南側の一部のみであり、墳丘の高さは約2m残存している。遺存している南側の墳丘上を巡る等高線はきれいな円形を呈し、また古墳の東隣を通る小道が古墳の墳丘裾部を示していると考えられ、これが円形に巡っていることから、墳形は円墳と判断できる。古墳の規模については、標高32.50m付近に傾斜変換点が認められ、古墳東隣の小道を墳丘裾部と考え、これをもとに復元すると直径約15mに復元できる。古墳の西側約9mの地点から須恵器杯蓋・壺の小破片3点(図版32b・c)が表採された。

4号墳は、3号墳の南東に隣接して築造されている。上部は江戸時代後期から末期の墓地となっており、墳頂部から北側は平地化されている(図版7・8)。東側についても果樹園となっており改変が著しいが、南側に墳丘斜面が遺存している。墳丘上の等高線はやや乱れ直線的なラインが巡り、標高30.50mと30.25mの間にはテラス状の平坦面が存在する。この平坦面より下部は急峻に落ち込み、標高29.50m付近に傾斜変換点が認められる。このテラス状の平坦面については、その方向性が果樹園造成に伴う石垣の主軸と同一であることから、近代の削平によるものと考えられ、墳形についても円墳と考えるのが妥当である。以上の点から、4号墳については墓地造成に伴う隆起の可能性も残るが、直径約9m、高さ約2.5m以上の円墳と判断できる。

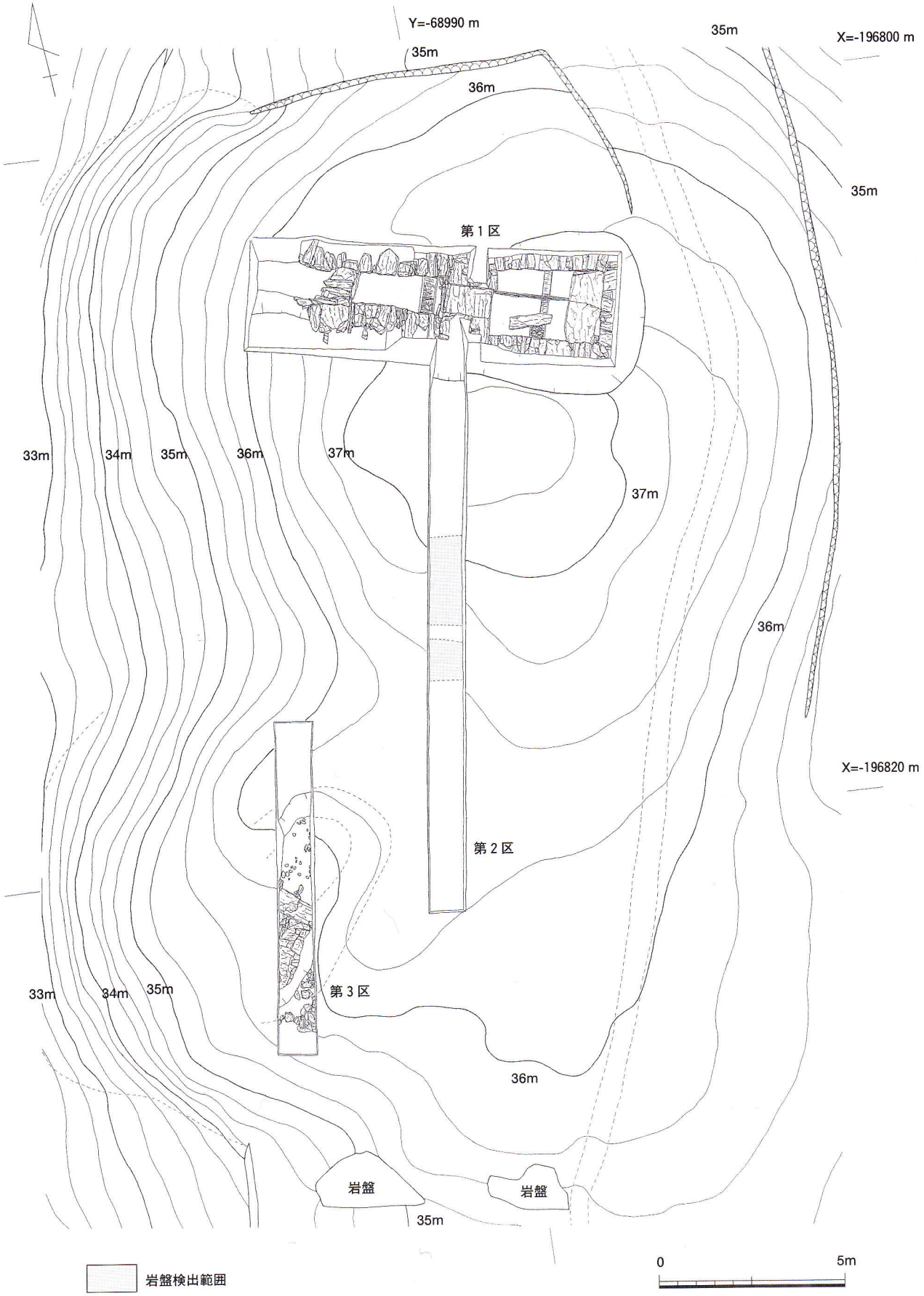
6．遺構

発掘調査は1・2号墳の墳丘上に3箇所の調査区を設定し、実施した(第7図)。第1区では1号墳横穴式石室を、第2区では1・2号墳の墳丘の状態を、第3区では2号墳の主体部の状況をそれぞれ確認した。以下に、各調査区の成果について報告を行う。

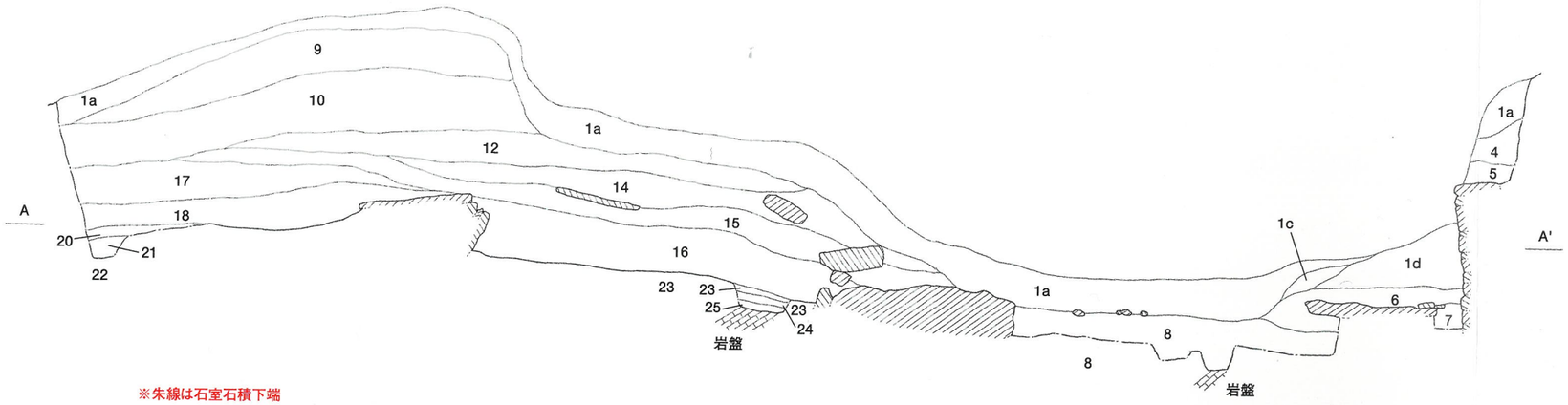
(1) 第1区(第8～11図、図版9～24)

第1区は、1号墳の横穴式石室周辺に設定した調査区である。検出された横穴式石室は、西に開口する両袖式のものであり、全長8.18mを測る。石室の形態は岩橋系の横穴式石室であり、石室に使用された石材は床面の円礫を除き全て結晶片岩の割石を用いている。奥・両側壁の石積みは20～50cm幅の石材を小口積みにし、その間隙に2～5cm大の細かな石材を詰め、主要石材が水平になるように意図して構築されている。玄室は上部を欠損しているが、羨道部は遺存状態が良く、持ち送りにより構築された状況が観察でき、上部は基底部より約20cm幅が狭まっている。

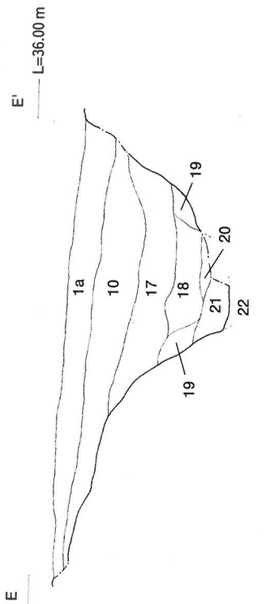
まず調査区の土層堆積状況について、第8図に示した。石室外は表土(1a)に墳丘構成土が堆積

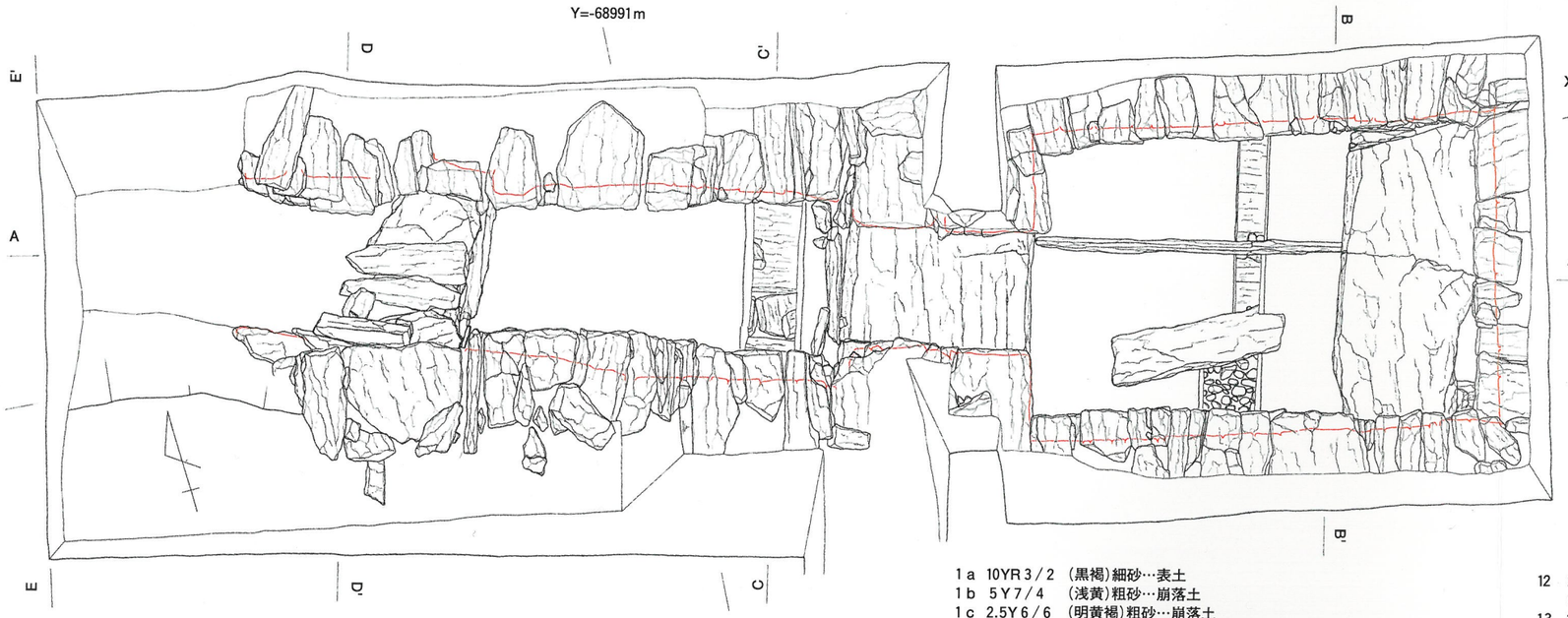


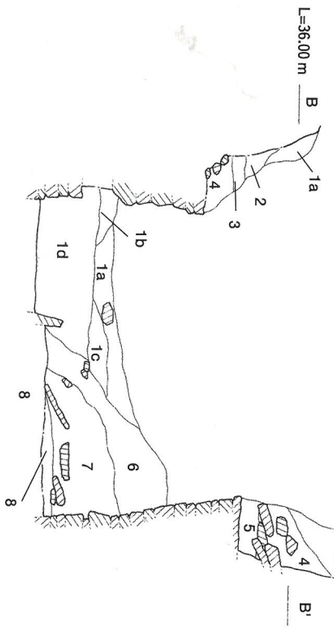
第 7 図　発掘調査区遺構全体平面図

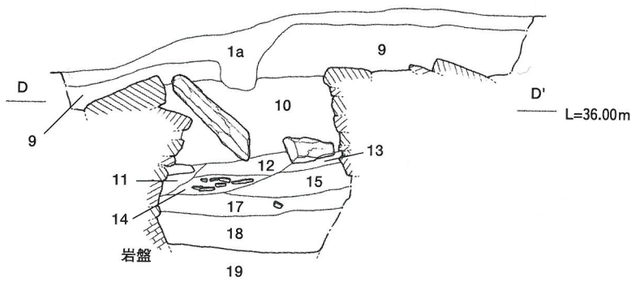


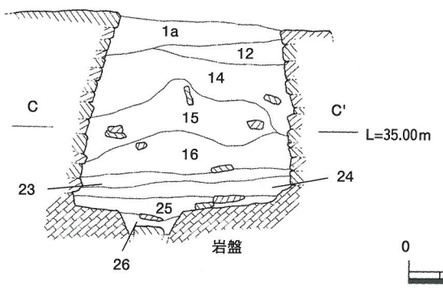
※朱線は石室石積下端











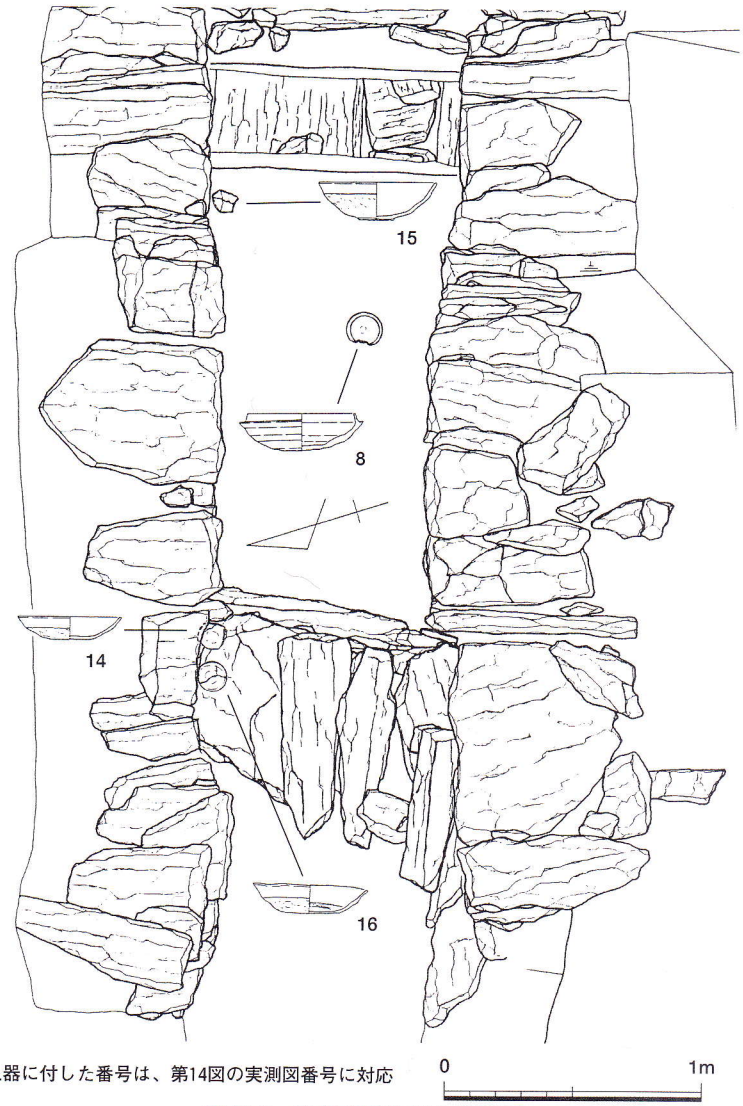
1 a　10YR 3 / 2　(黒褐)細砂…表土
1 b　5 Y 7 / 4　(浅黄)粗砂…崩落土
1 c　2.5Y 6 / 6　(明黄褐)粗砂…崩落土
1 d　10YR 3 / 2　(黒褐)細砂…腐葉土
2　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)粗砂混シルト(10cm 以下の片岩を一定量含む)…墳丘流入土
3　2.5Y 6 / 6　(明黄褐)粗砂混シルト(10cm 以下の片岩を一定量含む)…墳丘崩落土
4　5 Y 6 / 4　(オリーブ黄)粗砂混シルト(10～30cm 大の片岩を多量に含む)…墳丘崩落土
5　10YR 6 / 8　(明黄褐)粗砂…墳丘崩落土
6　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)粗砂(10cm 以下の片岩を一定量含む)…盗掘時の埋土
7　2.5Y 6 / 8　(明黄褐)粗砂(10～30cm大の片岩を多量に含む)…盗掘時の埋土
8　2.5Y 5 / 3　(黄褐)シルト混粗砂…盗掘時の玄室床面撹乱土
9　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)粗砂(5 cm 以下の片岩を少量含む)…流入土
10　2.5Y 7 / 4　(浅黄)粗砂(20cm 以下の片岩を多量に含む)…流入土
11　2.5Y 5 / 3　(黄褐)粗砂…中世の堆積土
12　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)シルト混粗砂(20cm 大の片岩を一定量含む)…中世の堆積土
13　2.5Y 6 / 3　(にぶい黄)粗砂…中世の堆積土
14　2.5Y 6 / 3　(にぶい黄)シルト混粗砂(20cm 大の片岩を一定量含む)…中世の堆積土
15　2.5Y 6 / 1　(黄灰)シルト混粗砂(明黄褐色シルトブロック)…中世の堆積土
16　10YR 5 / 4　(にぶい黄褐)粗砂混シルト(5～10cm 大の片岩を一定量含む)石室内流入土
17　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)粗砂混シルト(片岩屑混じり)…墓道埋土
18　2.5Y 5 / 3　(黄褐)粗砂混シルト(明黄褐色シルトブロック)…墓道埋土
19　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)粗砂…墓道埋土
20　7.5Y 6 / 2　(灰オリーブ)粗砂混礫(2～10cm 大の片岩を多量に含む)…墓道埋土
21　2.5Y 5 / 4　(黄褐)粗砂…墓道埋土
22　2.5Y 6 / 6　(明黄褐)シルト混粗砂(明褐色シルトブロック、片岩屑混じり)…墓道埋土
23　7.5YR 6 / 8　(橙)粗砂混シルト(片岩屑を多量に含む)…羨道部床面貼土
24　2.5Y 6 / 6　(明黄褐)粗砂混シルト…羨道部床面貼土
25　2.5Y 5 / 3　(黄褐)礫混粗砂(5 cm 大の片岩を多量に含む)…羨道部排水溝上面の礫敷き
26　2.5Y 5 / 3　(黄褐)粗砂…羨道部排水溝の埋土

第 8 図　第 1 区遺構全体平面図及び土層断面図

しているが、石室内部に向かって傾斜をもって堆積していること、石室の壁体である結晶片岩の割石を一定量含んでいることから、採石や石室の崩壊によって崩落した土層であると考えられる。これらは、シルト層(2～4)と粗砂層(5)が数単位ずつ互層に堆積しており、墳丘の構築方法についてその一端が窺える。

石室内の土層堆積状況については、基本層序の頁で記述したように、玄室と羨道部の状況は大きく異なっている。調査前の状況は、羨門部以西では石材が露呈しておらず、厚い堆積が確認できたのに対し、羨門から玄室に向かっては斜面をなして徐々に堆積が薄くなっており、玄室は壁面が約50cm ほど露呈している状況であった。玄室内部の堆積状況については、過去の盗掘や掘削によって大きく撹乱されており、その大半は近年の掘削以降に堆積した崩落土(1b・1c)や自然堆積土(1d)であり(図版13)、部分的に岩盤近くまで堆積している箇所も認められた。天井石とみられる巨石下の玄室南東隅や奥壁際では、近年の掘削を免れていたために結晶片岩の割石を多量に含む粗砂層(6・7)が厚く堆積していたが、これらは石室の壁体である結晶片岩の割石を多量に含んでいることから、盗掘時に掘削土を埋め戻した土層とみられる。その下層には本来床面に敷かれていた円礫を多量に含む盗掘時の床面撹乱土(8)が堆積しているが、これは断ち割り調査によって排水溝内部や岩盤直上まで及んでいることが判明し(図版14・15)、遺物がほとんど出土しなかったことからも、徹底した撹乱が行われているとみられた。

次に羨道部から墓道にかけては、表土下に墳丘の流入土(9・10)が厚く堆積しているが、羨道部では撹乱によって削られている。この下層は、中世の堆積層(11～15)であり、第12・14層からは羨門部付近に集中して瓦器椀2、同皿2、土師器皿1がほぼ完形の状態で出土した(第9図、図版20・21)。また第14層中には古墳の副葬遺物である完形の須恵器杯身(第14図8)が北側壁際で検出した瓦器椀(第14図15)と同一層で出土し、第15層が原位置を保つ閉塞石直上まで及んでいることから、これらは中世前期の盗掘に伴う堆積層であると考えられる。また、この中世の



土器に付した番号は、第14図の実測図番号に対応

第9図　羨道部遺物出土状況図

堆積は約60㎝と厚く単一ではないことや、遺物の出土レベルに高低差があり、各土器に型式差が認められることから、この段階で天井石は除去されており、副葬遺物を対象にした盗掘行為や石室の再利用が断続的に行われたことを示している。中世の堆積層と床面の間には、20～30㎝の厚さで堆積し、土質としてはよく締まった土層(16)が堆積している。この層は上下層との対応関係から、古墳築造後から中世前期までに堆積した流入土、もしくは追葬終了後の人為的な閉塞土の可能性が考えられる。その下層は羨道部の床面構成土(23～26)にあたり、標高約34.5ｍで岩盤に達する。断ち割り調査によって明らかになった羨道部床面の構造は、岩盤を整形した後に排水溝を設け、溝内を埋め戻し(26)、排水を目的とした砂利層(25)を敷いた後、貼り土(23・24)で床面を形成したものと考えられる(図版23)。

墓道については上部を盗掘の際に削られているが、下層は古墳時代の堆積土(17～22)であり、墓道の埋土にあたると考えられる。これらは固く締まった粘質の土層(17・18)を主体とし、その下層には砂利層(20)が薄く堆積する。この砂利層は、均一に敷き詰められた状況ではなく、その性格は判然としないが、羨道部の床面同様、排水の機能をもつ可能性がある。

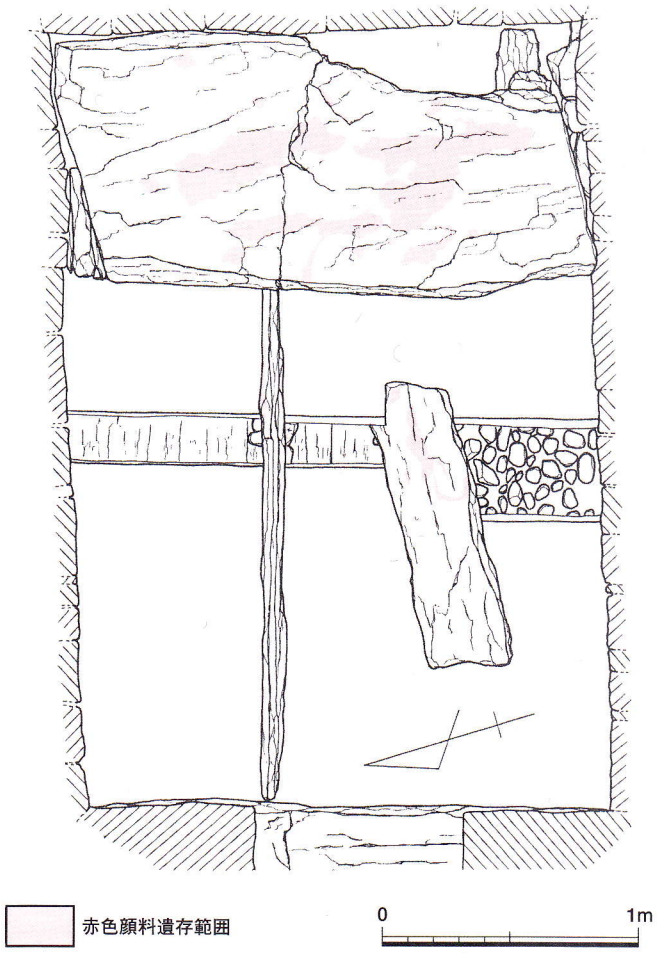
次に石室の構造について、玄室は長さ3.0ｍ、幅2.05ｍ、残存高1.61ｍを測り、石室規模は比較的大型の部類に属する(第10図)。袖幅は、右袖が65㎝、左袖が56㎝を測り、やや右袖が幅広く構築されている。床面は円礫を敷き詰めた構造と考えられるが、過去の盗掘や掘削により大きく撹乱されている。断ち割り調査の結果、北半部では撹乱層が岩盤まで及んでいたが、南半部では岩盤直上において原位置を保つ円礫が検出された(図版15)。このため、原位置を保つ円礫敷きの床面は南側のごく一部であると考えられる。

玄室内部の施設としては、棺台・仕切り石を検出した。棺台は奥壁に接して設置されており、長さ1.9ｍ、幅1.0ｍ、厚さ15㎝を測る一枚石と２箇所の支石によって構成されているが、南東の一部を欠損している。棺台は土圧によってひび割れしており、中央が窪んでいる。また、奥壁際は、棺台によってその空間を隙間無く満たす意図があると考えられ、棺台で満たない空間を北側では板状石材で補完している。南側では、棺台の高さに対応する側壁の一部を突出させることにより、空間を満たしていることから、棺台は石室構築が完了した段階で設置されたものではなく、石室の構築と併行しながら設置されたことが明らかである(図版14)。さらに、棺台の前面には棺障が付属しているが、大半の石材が抜き取られており、僅かに南側壁にその基部が遺存している(図版14)。棺障は遺存している基部から、高さ30㎝程度の板状石材とみられ、本来は棺台上面より約10㎝程度突出していたと考えられる。また棺台上面は僅かに赤色を呈することから、赤色顔料が塗布されていたと判断できる(第11図)。玄室中央部には、主軸に平行して左右１組で構成されたとみられる板状石材の仕切り石が検出された。この仕切石の内、北側のものは長さ2.2ｍ、幅28㎝、厚さ６～10㎝を測る石材を縦位に据え、玄室前道基石から棺台の下に組み込まれている。南側の石材は横転しているが、北側の石材と類似する長さ1.1ｍ、幅32㎝、厚さ５㎝を測るものが１石のみ遺存している。この南側の仕切り石については、４頁において記述したように、過去の掘削時には３石程度の石材を連結させ、北側同様に縦位に据え付けてあったとみられる。この仕切石は、棺台同様に僅かに赤色を呈することから、赤色顔料が塗布されていたとみられる(第11図)。排水溝は玄室のほぼ中央部に主軸に沿って設けられており、岩盤を掘り込んだ素掘りのものである。規模は幅25㎝以上、深さは10㎝と浅いものであり、蓋石等の施設はない(図版15)。

C
C'
L=35.00 m
岩盤
岩盤
B'
L=35.00 m
B
C
D'
B'
A
C'
D
B
A'
A
岩盤
A'
L=35.00 m
岩盤
D
D'
L=35.00 m
0
2m

第10図　1号墳横穴式石室平面・立面図

玄室前道部は長さ1.18ｍ、幅80㎝、残存高85㎝を測る。基石には長さ1.23m、幅2.0m以上、厚さ33㎝以上を測る巨石を用い、側壁についても他の部位に比べ比較的大型の石材を使用している(図版16・17)。玄室前道前面には、化粧石の残欠が残り、床面には閉塞石を保持するための板状石材が据えられている。このことから、扉石により閉塞が行われたと考えられるが、扉石とみられる使用石材は抜き取られており、遺存していない。



第11図　棺台仕切石赤色顔料遺存範囲

羨道部は玄室の主軸に対して北側にやや斜行して構築されており、長さは北側壁で2.35ｍ、南側壁で2.41ｍ、幅は玄室前道の前面で1.25ｍ、羨門部で1.05ｍを測り、羨門部ほど幅が狭くなっている。残存高は1.4ｍを測り、玄室に比較すると遺存状態は良好であり、床面は開口部にむかって高く傾斜している。羨門部南側壁の最上部には、他の石積みの構築方法とは異なり、板状の石材が縦位に据えられている(図版19)ことから、この上面に天井石が架構されていたと考えられる。側壁の基底部には岩盤質の石材を使用しているが(図版21・22)、これは断ち割り調査の結果、墓坑掘削時に岩盤を掘り残して基底部としていることが明らかとなった(図版23)。排水溝は羨道部の中央よりやや南側に偏って設けられており、岩盤を掘り込んで敷設されている。規模は幅40㎝、深さは20㎝以上を測り、結晶片岩の板石を用いた蓋石が検出された(図版23)。羨道部の排水溝は底面の確認は行っていないために石室外への排水方向は明らかではないが、蓋石の検出レベルから推察して玄室から羨道に向かう方向とみられる。閉塞は羨門部において行われており、閉塞石を保持するために床面を掘り込み、板状石材を縦位に据え、前庭部に板状石材を横位に積み上げている。閉塞石の内、原位置を保って検出されたのは下部のみであり、上部は原位置を遊離している。中世の堆積土内に類似した石材が混入していることから、その多くは盗掘時に除去されたとみられ、本来はさらに上部にまで閉塞石を積み上げていたと考えられる。

羨道前庭部は、長さが北側壁で1.65ｍ、南側壁で1.52ｍ、幅は羨門の前面で1.37ｍ、開口部で1.0ｍ、残存高は1.22ｍ以上を測り、開口部ほど幅が狭くなっている。羨道前庭部の壁面は、岩盤を堀り残して基底部にしている点は羨道部と共通するが、玄室や羨道部に比較して乱雑に積まれているため、右側壁においては大きく迫り出している(図版22)。このことから、前庭部は積み直しが行われている可能性が考えられる。この前庭部の前面には墓道が掘削されており、検出長1.4ｍ、幅2.0ｍ以上、深さは65㎝以上

を測る。墓道については、閉塞石検出レベルまでの掘削に留めているため、下部構造については明らかではない。

石室内からの出土遺物は、撹乱のため原位置を保つものはないが、玄室床面の撹乱土内から土師器・須恵器の破片、板状の鉄製品、鉄釘、ガラス玉の破損品が検出された他、棺台の欠損部から耳環が1点出土した。築造年代については、石室の構造や過去に出土した土器の型式から6世紀後葉の築造と考えられる。

(2) 第2区(第12図、図版25・26)

第2区は、1号墳から2号墳の墳丘上にかけて設定した調査区である。当初、1・2号墳は墳丘の流出により墳丘が一体化し、同一古墳の可能性が考えられたため、その確認が課題の一つにあげられた。

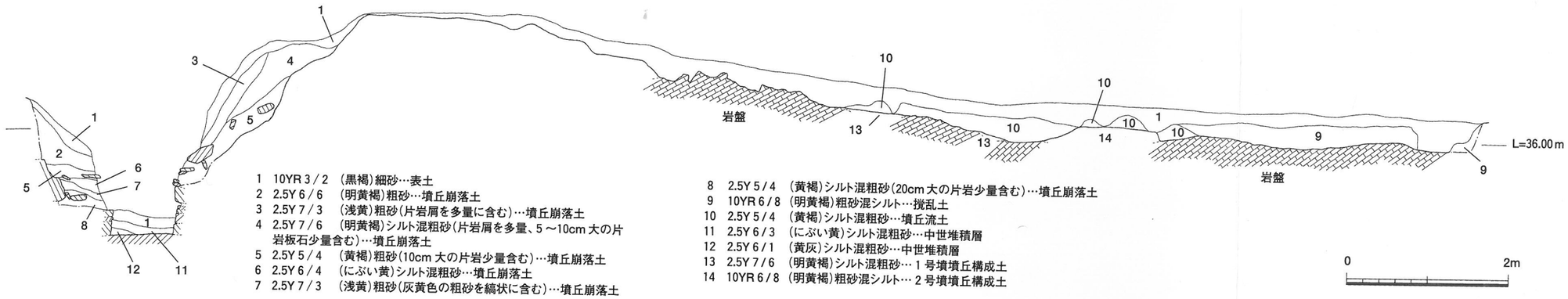
表土層(1)を掘削した結果、調査区北端の1号墳墳頂部においては墳丘構成土(13)が検出された。その東側では、大部分において表土下に岩盤が露呈し、その一部において墳丘流土(10)や墳丘構成土が検出された状態であった。このことから、墳丘はその大半が流出していると考えられ、墳丘裾部を巡る周溝などは検出されなかった。調査区南端の2号墳においては、表土下に墳丘構成土に表土が混じった撹乱土(9)が堆積し、この下面で墳丘構成土(14)が検出された。2号墳も1号墳同様に墳丘の流出が著しく、岩盤まで撹乱が及んでいる地点がみられたが、1号墳に比較すると墳丘の遺存状態は良い。1号墳同様に周溝は検出されず、互いの墳丘の重複部分も流出により検出できなかったため、その前後関係や同一古墳の是非については明らかにできなかった。しかし、残存する墳丘裾部が極めて近接して築造されていることから、別古墳と仮定した場合、当初より周溝を設けず互いの墳丘を相接して築造されたものと考えられる。

(3) 第3区(第13図、図版27～29)

第3区は、2号墳の墳頂部で確認した浅い「U」字形の落ち込みが、主体部の崩落した痕跡である可能性が考えられたため、その有無を確認するために設定した調査区である。表土層(1)下に墳丘流土(2)及び墳丘構成土(9)が検出され、その下面において土坑状の落ち込みを検出した。この落ち込みは掘削の結果、盗掘坑であることが判明し、その底面において横穴式石室を検出した。

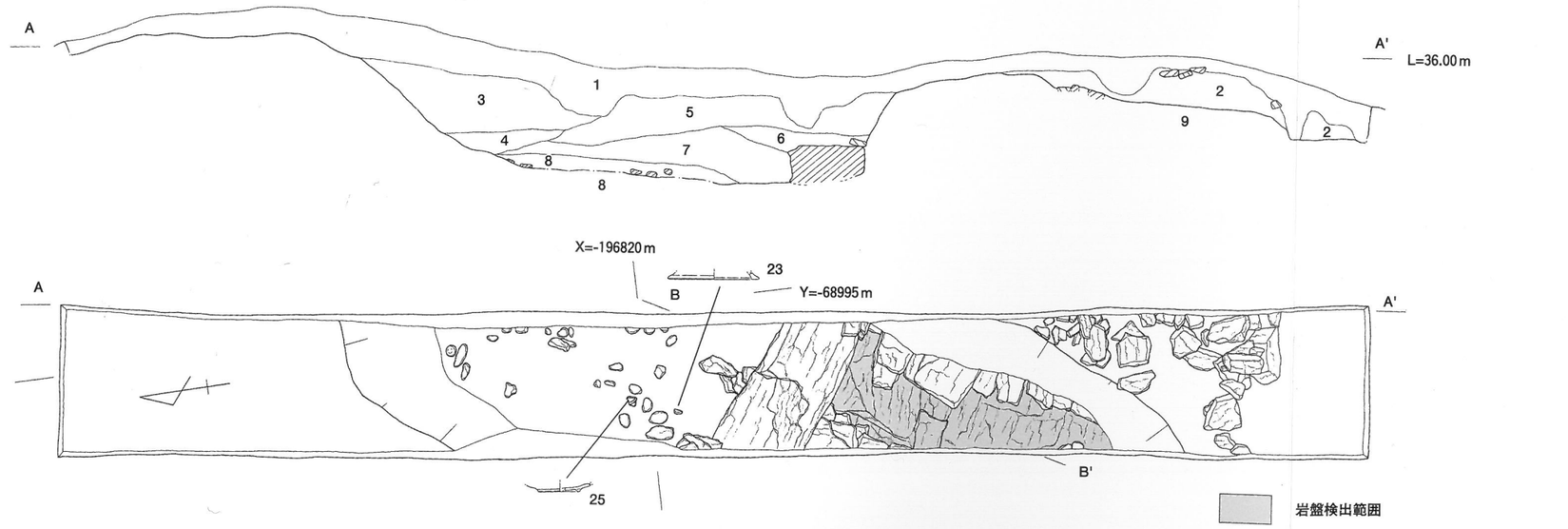
盗掘坑内の堆積は、その上部において石室の壁面を構成していたと考えられる結晶片岩の割石を含む黄褐色系の砂層が4単位(3～6)堆積し、その下層には床面に敷かれていた円礫を包含する砂層(7・8)が堆積している。下層から盗掘坑の中央部において大型の石材が検出されたが、これは当初天井石の一部であると判断し下層の掘削を行ったが、その北側で排水溝とみられる片岩の石列を、その南側で石室の側壁と岩盤を検出した(図版29)。このことから残存しているのは石室基底部のみであり、天井石とみられた大型の石材は玄室前道部の基石で、その上部を大きく破壊されていることが明らかとなった。

検出された横穴式石室は、結晶片岩の割石で構築された岩橋系の石室である。開口方向は南西であり、1号墳とは主軸を異にしている。玄室は長さ2.0m以上、幅90cm以上を測り、床面は円礫敷きであるが、内部を大きく撹乱されており、原位置を保つ円礫は検出されなかった。また、玄室前道の北側30cmの範囲には排水溝の蓋石とみられる結晶片岩の石列を検出した。この排水溝は、玄室前道基石



1　10YR 3 / 2　(黒褐)細砂…表土
2　2.5Y 6 / 6　(明黄褐)粗砂…墳丘崩落土
3　2.5Y 7 / 3　(浅黄)粗砂(片岩屑を多量に含む)…墳丘崩落土
4　2.5Y 7 / 6　(明黄褐)シルト混粗砂(片岩屑を多量、5～10cm 大の片岩板石少量含む)…墳丘崩落土
5　2.5Y 5 / 4　(黄褐)粗砂(10cm 大の片岩少量含む)…墳丘崩落土
6　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)シルト混粗砂…墳丘崩落土
7　2.5Y 7 / 3　(浅黄)粗砂(灰黄色の粗砂を縞状に含む)…墳丘崩落土
8　2.5Y 5 / 4　(黄褐)シルト混粗砂(20cm 大の片岩少量含む)…墳丘崩落土
9　10YR 6 / 8　(明黄褐)粗砂混シルト…撹乱土
10　2.5Y 5 / 4　(黄褐)シルト混粗砂…墳丘流土
11　2.5Y 6 / 3　(にぶい黄)シルト混粗砂…中世堆積層
12　2.5Y 6 / 1　(黄灰)シルト混粗砂…中世堆積層
13　2.5Y 7 / 6　(明黄褐)シルト混粗砂… 1 号墳墳丘構成土
14　10YR 6 / 8　(明黄褐)粗砂混シルト… 2 号墳墳丘構成土

第12図　第 1・2 区東壁面土層断面図



1　10YR 3 / 2　(黒褐)細砂…表土
2　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)シルト混粗砂…墳丘流土
3　10YR 5 / 4　(にぶい黄褐)粗砂(10cm 大の片岩割石を一定量含む)
4　10YR 5 / 6　(黄褐)粗砂(明褐色シルト混じり)
5　2.5Y 6 / 6　(明黄褐)粗砂(10cm 大の片岩割石を少量含む)
6　2.5Y 5 / 4　(黄褐)粗砂
7　10YR 5 / 4　(にぶい黄褐)粗砂(明褐色シルト混じり、円礫を少量含む)
8　2.5Y 6 / 4　(にぶい黄)粗砂(明褐色シルト混じり、円礫を一定量含む)
9　10YR 6 / 8　(明黄褐)粗砂混シルト… 2 号墳墳丘構成土
10　10YR 5 / 8　(黄褐)シルト混粗砂(灰白色粗砂を含む)…床面構成土

土器に付した番号は第15図の実測図番号に対応

第13図　第 3 区遺構平面図及び立面図・土層断面図

の下を通り、羨道へと続いている。石室内部におけるの出土遺物は、古墳の副葬遺物である須恵器杯蓋・高杯脚部が床面から遊離した状態で検出された他、中世の土師器片が出土した。玄室前道部は長さ56cm、幅90cm以上を測り、基石に使用された石材の厚さは26cm以上を測るものである。玄室前道前面には、側壁が抜き取られ隙間となっていることから、本来化粧石が存在していたと考えられる。羨道部は長さ1.8m以上を測り、排水溝を石室の中心と仮定して復元を行った場合、幅は約1.0mの規模と想定される。側壁は、岩盤上に貼り土(10)を行いながら15～40cm幅の石材を小口積みにして構築しており、ほぼ基底石のみが遺存している。

以上、2号墳で確認した横穴式石室は、1号墳に比較すると玄室前道基石が小規模であること、床面の比高差が約90cmあり、高い位置に構築されていることから、小規模な石室であったと考えられる。築造年代については、出土した須恵器杯蓋の口径が小型化していることから、1号墳より後出する6世紀末葉以降の築造であるとみられる。また、1・2号墳が同一の古墳であるか否かについては、2号墳の横穴式石室が墳丘の西端に偏って構築されていることから、別古墳とするのが妥当であると判断された。

7．遺物

本調査で出土した遺物は、主に1号墳横穴式石室(第1区)を中心として、遺物収納コンテナ約3箱分が出土した。出土遺物には土師器、須恵器、中世土師器、瓦器、国産陶磁器、瓦、土製品、金属製品、ガラス製品、炭などの自然遺物がある。これら出土遺物の内、古墳に関連するものとしては、1号墳から土師器壺・高杯、須恵器杯身・高杯・短頸壺・台付壺・甕・器台、耳環・鉄製工具などの金属製品、ガラス製小玉が出土した。2号墳からは須恵器の杯蓋・高杯、3号墳では表採された須恵器の杯蓋・壺の小破片がそれぞれ出土しているが、出土量は少ない。また古墳時代以降の遺物としては、1・2号墳盗掘時の堆積層から中世土師器椀、瓦器椀・皿などが出土している。その他、表土層から肥前系陶器碗や同染付磁器碗・皿、銅緑釉の仏飯器、近代磁器碗・皿、瓦類や稲荷信仰に伴う土人形などが出土している。

本報告ではこれらの出土遺物について、まず1号墳・2号墳出土の土器類の記述を行い、その後に土製品、金属製品、ガラス製品の記述を行う。

(1)1号墳出土の土器(第14図、図版30・31)

7～13は須恵器である。7は口径16.6cmを測る杯蓋であり、焼成不良のため軟質に仕上がった個体である。口縁部と天井部を画する稜はなく、口縁端部は丸くおさめている。復元される口径が大型であることから、有蓋高杯の蓋である可能性も考えられる。

8はほぼ完形で口径12.6cmを測る杯身であり、器高は4.3cmとやや深い形態を呈する。口縁部の立ち上がりは大きくはなく、あまり内傾しておらず、受け部は外上方に短くのびる。底部のヘラケズリは、比較的丁寧に施されている。

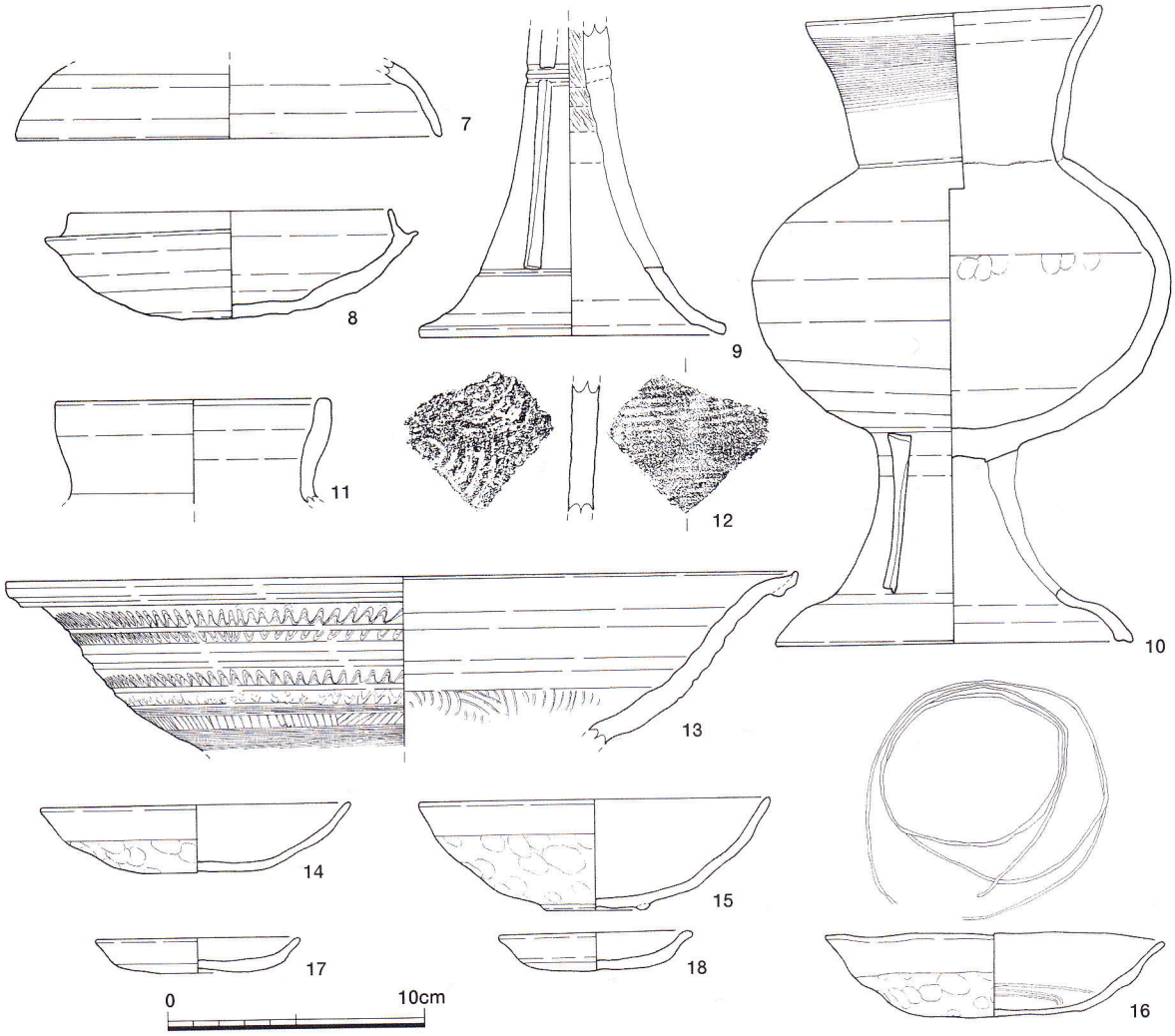
9は脚部径12.0cm を測る長脚２段３方透かしの高杯脚部であるが、透かし間の接合面は剥離している。脚端部はわずかに下方へ屈曲し、端面は丸くおさめている。透かし孔は外面側から穿たれており、透かし間に２条、下段の透かし下にも１条の沈線が巡る。また、内面の上部にはシボリ目が顕著にみられる。

10は口径11.4cm、器高25.1cm、脚部径14.0cm を測る脚付壺である。口頸部は器壁が薄くつくられ、短く直立する形態のものであり、やや傾いて接合されている。外面はカキメにより調整されており、内面には接合痕跡が顕著に残る。体部は丸みのある形態であり、中位には成形段階の指オサエの痕跡が内外面にみられ、下部は顕著なヘラケズリの痕跡を残す。また、脚部との接合には、カキメによって接合強化を図っている。脚部の透かしは３方であり、外面側から穿たれている。脚部は裾部に至って大きくひらき、端部は垂下し、接地面は凹線状にくぼむ。

11は口径10.6cm を測る短頸壺の口縁部である。器壁はやや厚手なつくりであり、外反ぎみにひらき、端部は直立ぎみに立ち上がる形態を呈する。

12は甕の体部とみられるもので、外面には平行タタキ目が、内面には同心円文の当て具の痕跡が残る。

13は、口径31.0cmを測る器台の口縁部である。やや浅い椀状の形態をなし、口縁端部は粘土帯を



第14図　遺物実測図１

貼付けることによって縁帯をなす。成形はタタキによって行われており、内外面にはナデ残された平行タタキ目と同心円文の当て具の痕跡が残る。外面はヨコナデ調整、沈線を5条施した後、下部をカキメ調整し、波状文を2段施す。

7～13の須恵器については、7を除き焼成はいずれも堅緻で、胎土中には結晶片岩・石英・長石を含むことから、在地産のものと考えられる。また、ロクロの回転方向については、8・9・11が左回り、10が右回りである。これらの出土位置は、7・9・10・12が第1区南西隅の表土層(第8図1a層)、8が羨道部中央の第8図第14層、11が調査区南西隅の第8図第9層からそれぞれ出土し、13は北西部の墳丘斜面で表採したものである。

14はほぼ完形の土師器の皿であり、口径12.2cm、器高2.6cmを測る。ナデと指オサエによって成形した後、口縁部をヨコナデ調整するものであり、器壁は薄くつくられている。

15～18は瓦器である。15・16は椀であり、ナデと指オサエによる成形後、口縁部を強いヨコナデによって外反させるものである。15は口径13.6cm、器高4.4cm、高台径4.0cmを測るものであり、高台は粘土紐を貼付けた小さなものである。全体的に磨滅が著しく、内面の暗文は不明である。16は底部に高台をもたない完形の個体であり、口径13.0cm、器高3.4cmを測る。15より年代的に後出するものであり、内面の渦巻き状暗文も4回転と退化している。口縁部には1箇所粘土の結合痕跡があり、結合部分の内側が盛り上がり、その部分に粘土補充が行われている。これは製作痕跡を示すものであり、16は粘土板を用いた型づくりによって成形された可能性がある。

17・18は皿である。ともにナデと指オサエによる成形後、口縁部を強いヨコナデによって外反させるものであり、18の方が口縁部の外反は強い形態を呈する。17はほぼ完形の個体であり、口径8.0cm、器高1.4cm、18が口径7.6cm、器高1.5cmをそれぞれ測り、法量は近似している。

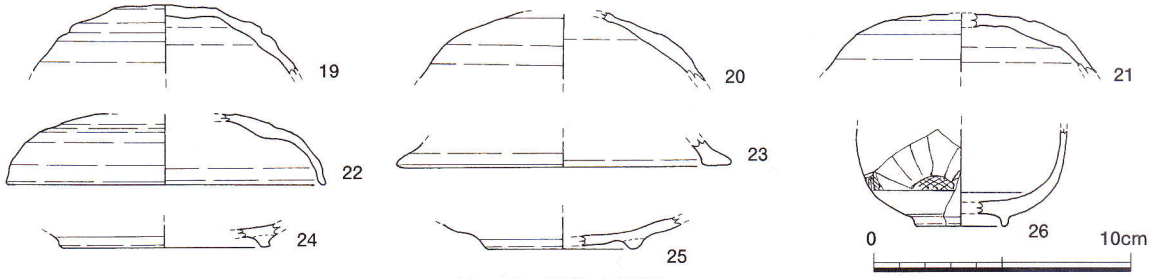
14～18は中世前期における盗掘時の堆積層に伴う遺物であり、その出土位置は14・16～18が羨道部閉塞石上部の第8図第10層、15が羨道部北側壁際の第8図第14層からそれぞれ出土している。

(2) 2号墳出土の土器(第15図、図版31・32)

19～23は須恵器である。19～22は杯蓋であるが、いずれも口径がやや小型化し、天井部も丸みをもつ形態のものである。ヘラケズリも天井部のみであり、19・21はヘラ切り未調整の個体である。22は口径12.6cmを測り、天井部と口縁部の境を凹線によって画するものである。

23は高杯か壺の脚端部とみられる小破片であり、復元径12.4cmを測る。接地面はほぼ平坦であり、端部はやや尖り気味におさめている。

19～23の焼成はいずれも堅緻で、胎土中には石英・長石粒を含むことから、在地産のものと考え



第15図　遺物実測図2

られる。また、ロクロの回転方向が判明する個体については、19・21・22のいずれもが左回りである。これらの出土位置は、19・23が第３区石室床面撹乱土（第13図第８層）、20が第３区石室盗掘坑の下層（第13図第７層）、21・22が墳丘南西斜面からそれぞれ出土した。

24・25は土師器の椀である。24は高台径8.0cmを測り、方形の低い貼付け高台を有する。25は高台径6.0cmを測り、丸みのある低い貼付け高台を有するものであり、高台付近は強いヨコナデを施す。24・25は盗掘時の堆積層に伴う遺物であり、24が第３区石室床面撹乱土（第13図第８層）、25が第３区石室盗掘坑の下層（第13図第７層）からそれぞれ出土している。

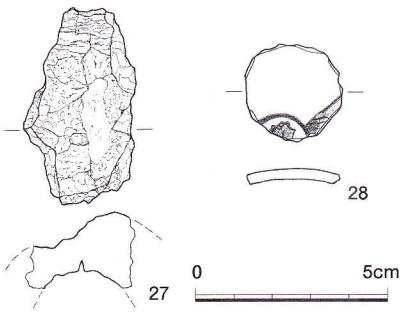
26は、高台径3.6cmを測る肥前系磁器の染付丸碗である。外面には菊花文と圏線、内面にも圏線がそれぞれ描かれている。高台は低い形態のものであり、畳付部の釉薬は削り取られている。第３区の表土層（第13図第１層）から出土した。

（３）土製品（第16図、図版32）

土製品には、フイゴ、稲荷信仰に伴う土人形が出土しており、円板状の転用品についてもここで扱う。

27はフイゴの羽口であり、先端の開口部が僅かに残存するものである。全面が溶解しており、一部がガラス化している。色調は黒色を呈し、胎土中には微砂粒を一定量含んでいる。１号墳（第１区）玄室の床面撹乱土（第８図第８層）から出土した。

28は丘陵斜面で表採した、肥前系磁器染付を用いた円板状の転用品であり、直径2.5cm、厚さ３㎜を測るものである。打ち欠いた破断面は研磨が施されており、用途としては面子に用いられたものとみられる。



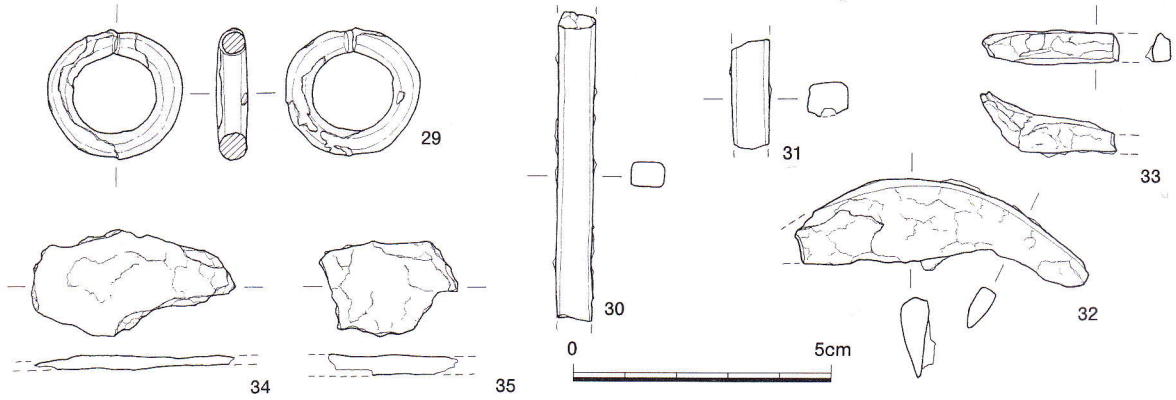
第16図　遺物実測図３

（４）金属製品（第17図、図版32）

29は第１区玄室の南東隅、棺台の欠損部から出土した銅芯銀張の耳環である。長径2.7cm、短径2.5cm、環部径1.6～1.7cm、芯径５㎜を測るほぼ正円に近い形状のものであり、重量は5.9ｇである。開き部は錆によって一体化しているが、本来は１㎜程度の間隔があるとみられる。表面を被覆している銀薄板（第17図スクリーントーン部）は大部分がはがれ、銅芯が露呈しており、銀薄板の色調も暗茶褐色に変色している。銅芯は中実で断面の形状はほぼ円形であるが、かなり腐食が進行しており、錆化して緑青が吹き出している。

30・31は長頸鉄鏃の茎部とみられるものであり、残存長は30が6.2cm、31が2.2cmである。断面は幅が７㎜、厚さは30が５㎜、31が６㎜を測り、長方形を呈した角柱状である。矢柄等の痕跡は認められない。

32は残存長5.9cmを測る鉄製刀子とみられるものである。刃は直線であるが、背は曲線を呈するものであり、刃部最大幅は1.7cmを測る。背は５㎜とやや厚みのあるものであり、茎は背から続いて曲線を呈し、徐々に幅を狭める形態で、刃に対して鋭角に取り付いている。刃・背部ともに木質等の痕跡は認められない。



第17図　遺物実測図４

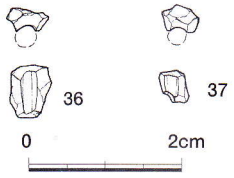
33は鑿またはヤリガンナの先端部とみられるものであり、残存長2.2cmを測る。刃部の長さは約１cm、幅７mmで、茎部は刃部と同じ幅でつづくものである。

34・35は用途不明の鉄製品で、厚さは34が３mm、35が４mmを測る板状のものである。古墳の副葬品とみるならば、鉄斧等の破片である可能性が考えられる。

30～35の鉄製品は、全て１号墳(第１区)玄室の床面撹乱土(第８図第８層)から出土したものであり、原位置を遊離している。また全体的に錆化があまり進んでおらず、32の形態は古墳時代の刀子と比較すると異形であることから、これらの遺物は古墳の副葬遺物ではなく、中世以降の盗掘に伴う遺物の可能性も想定される。

（５）ガラス製品（第18図、図版32）

ガラス製品としては、ガラス玉がある。ガラス玉は１号墳(第１区)玄室の床面撹乱土(第８図第８層)の洗浄作業によって検出したものである。出土位置は玄室の各地点から検出されたが、その中でも棺台上面とその周囲に集中していることが指摘できる。完形のものはなく、全て微細化した破損品であり、破片点数にして28点が出土している。これらは欠損面自体が丸みを帯びたものもあることから、かなりの撹乱を受けているものと判断できる。このため径、高さなどの法量や形状などは明らかではないが、色調と推定される法量から少なくとも以下の２種類のものがあるとみられる。一つは色調がやや濃い青色を呈するもの(36・37)で、比較的大きな破片である36を参考に検討すると、径９mm、高さ７mm程度の法量が想定される一群である。もう一種類は前者よりも法量が小さく、色調もより淡い青色を呈する一群である。いずれの貫孔も垂直に穿たれており、孔径は２mm程度と推定される。



第18図　遺物実測図５

8. まとめ

(1) 和坂南垣内古墳群の調査成果と評価について

今回の調査成果の一つとしては、新発見の遺跡である和坂南垣内古墳群についての基礎的な資料を得ることができた点があげられる。和坂南垣内古墳群は岩橋山塊から南に延びる丘陵端部、後背の丘陵から突出した独立丘陵上に位置し、横穴式石室を埋葬主体とした4基以上の円墳から構成される古墳群であることが判明した。また、調査によって明らかになった各古墳の内容については、1号墳が直径24mの大型円墳で、玄室に棺台・仕切石などの施設をもつ大型の横穴式石室を内部主体とし、築造時期は6世紀後葉である。2号墳は直径12mの円墳で、小型の横穴式石室を内部主体とし、築造時期は6世紀末葉以降である。3号墳は直径15mの円墳、4号墳は直径9mの円墳であり、ともに内部主体や築造時期については不明である。

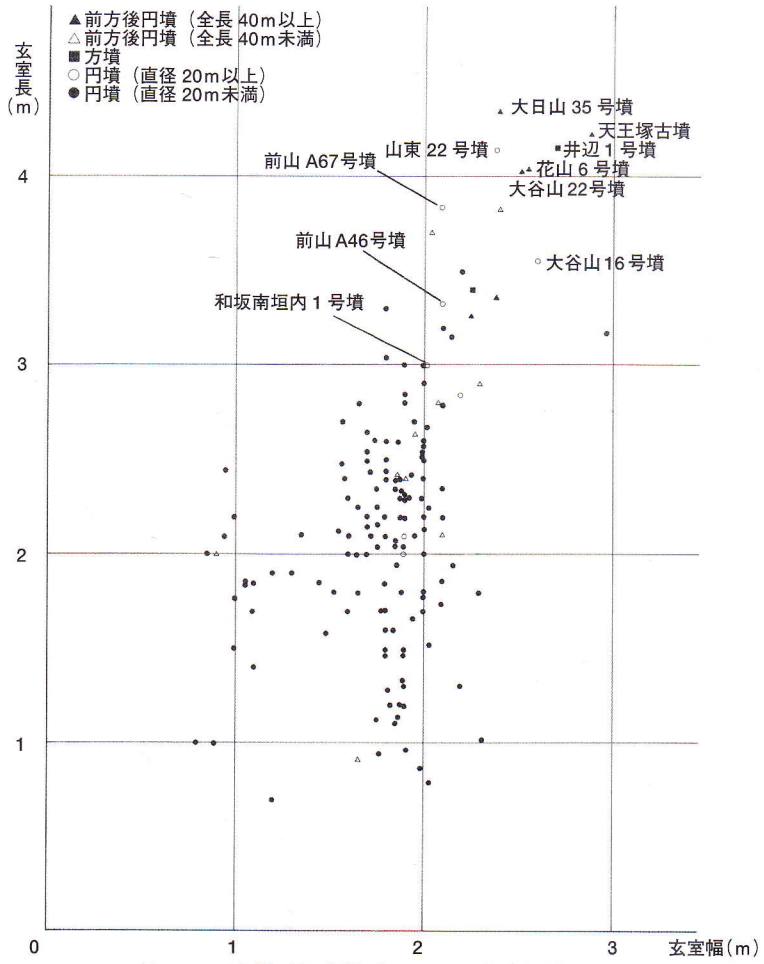
各古墳の細かな築造年代については、1号墳が第3・14図に掲載した出土土器類が陶邑編年[(1)]TK43型式を主体とし、TK209型式までの時期幅をもつものであることから、1号墳の築造時期は6世紀後葉に求められ、末葉まで追葬期間があったと考えられる。石室構造から岩橋千塚古墳群における首長墓の編年に照らし合わせた場合、1号墳の横穴式石室は玄室前道前面の「化粧石」の存在から前山B53号墳（将軍塚古墳）併行期と判断できる。2号墳については、第15図に掲載した須恵器杯蓋がいずれも小型化したものであり、TK209型式でも新相を示すものであることから、2号墳の築造年代は1号墳の追葬が終了して間断ない時期に求められ、7世紀初頭頃と考えられる。

また、1～4号墳の4基の古墳は1・2号墳と3・4号墳が互いに近接して築かれ、その間に一定の距離をとっている。和歌山県内においても7世紀以降には古墳の造営は衰退していくため、6世紀後葉以降において一家長系列のみが一代一墳的に4基の古墳造営を行ったとは考えにくい。このことから、和坂南垣内古墳群は、2つの造営主体によって築かれた古墳群であると考えられる。

次に、和坂南垣内古墳群の評価を行うにあたり、古墳群の立地環境が注意される。本古墳群周辺の古墳分布は、岩橋千塚古墳群から本古墳群周辺までの岩橋山塊には濃密な分布を示すのに対し、本古墳群の東に位置する高積山には古墳の分布がほとんど確認されておらず、それ以東の鳩羽山塊においても古墳の築造数が極端に減少する(第2図)。これら高積山以東の古墳群については、群集墳の形成が6世紀前葉以降であること、その規模が小さいこと、石室の使用石材に蛇紋岩と結晶片岩を併用し、玄門部袖石を立柱石としたり、穹窿式横穴式石室[(2)]がみられるなどの様相は、岩橋千塚古墳群とは異なるものである。岩橋山塊と鳩羽山塊の間は、高積山が障壁のように位置することによって異なる文化圏を形成していたことが窺われ、岩橋山塊の東端に位置する和坂南垣内古墳群は、1号墳の横穴式石室が岩橋千塚古墳群と同型のものであることからも広義の岩橋千塚古墳群の東端に位置づけることができる。また岩橋山塊と鳩羽山塊の間は、名草郡と那賀郡の郡境にあたり、中世においては本古墳群の東隣を熊野古道が通るなど、古墳時代においても交通の要衝であることが想定されることから、本古墳群の立地環境は極めて重要な位置を占めるものと評価できる。

さらに本古墳群の被葬者像を検討するにあたり、盟主墳である1号墳について石室規模と墳形・墳丘規模の面から検討してみる。岩橋千塚古墳群においては内部主体の横穴式石室に斉一性があることから、横穴式石室の規模が墳形や墳丘規模とともに、被葬者の階層差を端的に表出していることが

多くの先学の研究により明らかにされている[3]。そこで岩橋千塚古墳群における横穴式石室と1号墳の玄室平面規模について第19図に示した[4]。第19図によると、和坂南垣内1号墳の玄室規模は、天王塚古墳や大日山35号墳など国造級の大型前方後円墳や井辺1号墳の大型方墳などに採用された、玄室長が4mを越える卓越した規模をもつグループの下位に位置するものであり、将軍塚古墳や大谷山28号墳、井辺前山6号墳など全長40m前後の前方後円墳や前山A46・67号墳や大谷山16号墳など直径20m以上の大型円墳に主として採用されたグループであることが分かる。



第19図　岩橋千塚古墳群における玄室規模

さらに1号墳は直径24mを測る大型円墳であるが、和歌山県内の古墳時代後期における25m以上の大型円墳について表1に示した。これをみると、25m以上の大型円墳は岩橋千塚古墳群に集中し、大谷山16号墳、前山A46・67号などは尾根の最高所に築造されており、前方後円墳に次ぐ好位置を占めている。寺内37・42・44・57号墳などは尾根頂部に位置し、そのなかでも寺内57号墳は玄室長が5mを越える玄室規模をもつとされることから、前方後円墳消滅以後の首長墳である可能性が考えられる。岩橋千塚古墳群以外の地域では在地首長墓や主要な古墳群の盟主墳に採用されており、紀ノ川下流の北岸地域では晒山10号墳（全長35mの前方後円墳）以降、奥出古墳→園部円山古墳という首長系譜の古墳に大型円墳が築造されている。

No	遺跡名	所在地	立地	規模(m)	内部主体	時期
1	黒土古墳	打田町黒土	段丘崖上	25	横穴式・竪穴式石室	6c中葉
2	花山9号墳	和歌山市岩橋・鳴神	尾根端部	30	横穴式石室	6c末葉
3	前山A24号墳	和歌山市岩橋	尾根頂部	25	横穴式石室	
4	前山A46号墳	和歌山市岩橋	尾根頂部	27	横穴式石室	6c後葉
5	前山A67号墳	和歌山市岩橋	尾根斜面	27	横穴式石室	6c後葉
6	井辺前山38号墳	和歌山市井辺	尾根頂部	30	横穴式石室?	
7	寺内37号墳	和歌山市森小手穂	尾根頂部	30	横穴式石室	
8	寺内42号墳	和歌山市森小手穂	尾根頂部	30	不明	
9	寺内44号墳	和歌山市森小手穂	尾根頂部	37	不明	
10	寺内57号墳	和歌山市森小手穂	尾根頂部	35以上	横穴式石室	6c後葉
11	山東22号墳	和歌山市吉礼	尾根端部	26～28	横穴式石室	6c後葉
12	奥出古墳	和歌山市園部	尾根端部	25	横穴式石室	6c中葉
13	園部円山古墳	和歌山市園部	尾根端部	25	横穴式石室	6c後葉
14	室山3号墳	海南市黒江	丘陵頂部	25	不明	
15	天神山古墳	湯浅町別所	丘陵頂部	30	箱式石棺	6c前葉
16	上ミ山古墳	すさみ町周参見	丘陵頂部	40	横穴式石室	6c前葉

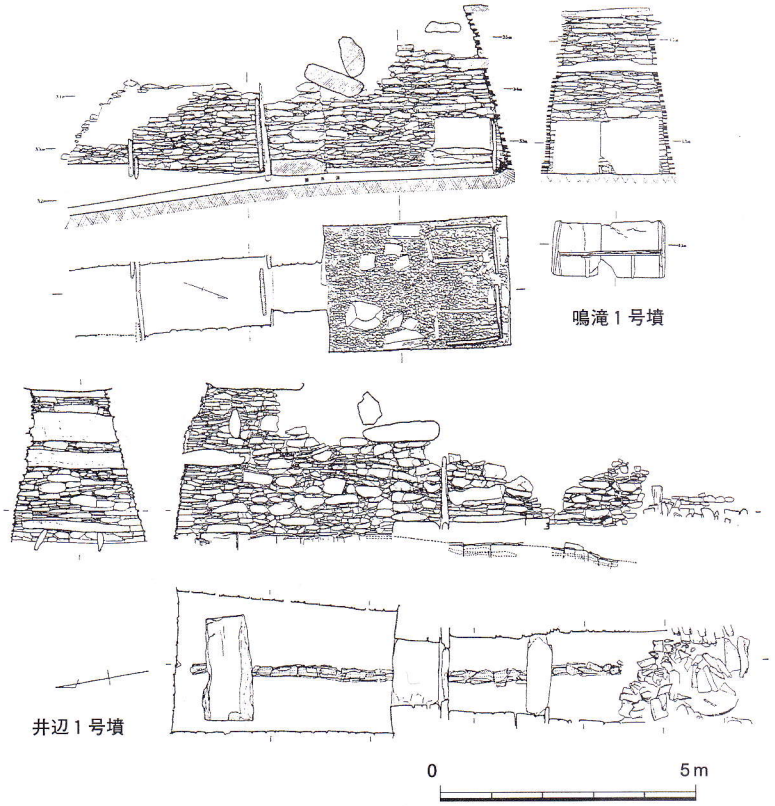
第1表　和歌山県内大型円墳一覧

以上、和坂南垣内古墳群はその立地環境において、広義の岩橋千塚古墳群の東端を占める重要な遺跡であると評価でき、和坂南垣内1号墳の墳形や墳丘・石室規模、岩橋千塚と同型の埋葬施設が採用されていることからみて、その被葬者は国造級の大型前方後円墳、全長40m前後の小型前方後円墳に次ぐ階層で、これら首長層と強い類縁関係や紐帯をもつ有力成員層と考えることができる。

（2）１号墳横穴式石室の構造について

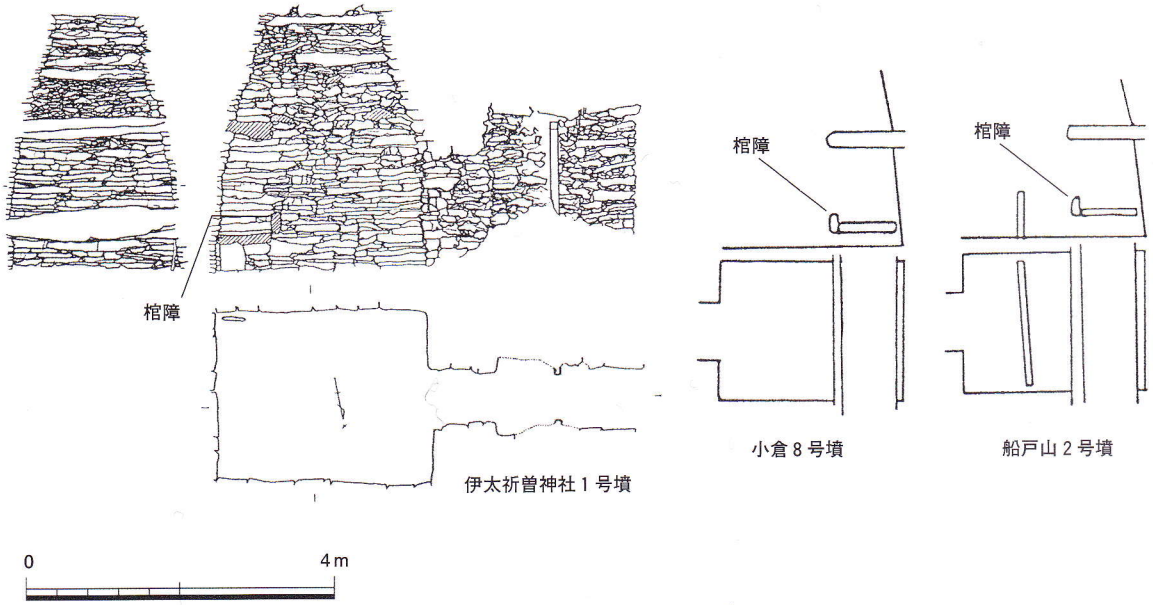
以下では、１号墳横穴式石室の構造の内、玄室に設置された諸施設の検討を行う。

まず棺台について検討してみると、岩橋系の横穴式石室では奥壁際に主軸に直交する形で第１次埋葬を行うことが基本となっており、その施設としては組み合わせ式石棺や石棚を屍床とするもの、石障や仕切石、敷石や溝で画する事例があるが、本例のように棺台をつくり付ける事例は少ない。この類例としては岩橋千塚古墳群前山Ａ67号墳、同井辺１号墳[5]、和歌山市山東22号墳[6]や同鳴滝１号墳[7]がある（第20・23図）。時期的には６世紀後葉から末葉の古墳に集中し、構造的にみて前山Ａ67号墳や鳴滝１号墳のように石屋形状の棺台から付属施設を伴わない井辺１号墳の省略形態へ変遷するものと考えられる。和坂南垣内１号墳は棺台のみの省略形態であるが、棺台で満たない空間を側壁の一部を突出させたり、板状石材で補完し、棺台が奥壁の空間を一杯に満たしている点や、その前面に棺障が付属していることから判断して、井辺１号墳より先行し、棺台のみの省略形態へ移行する過渡期に位置づけられる事例と評価できる。

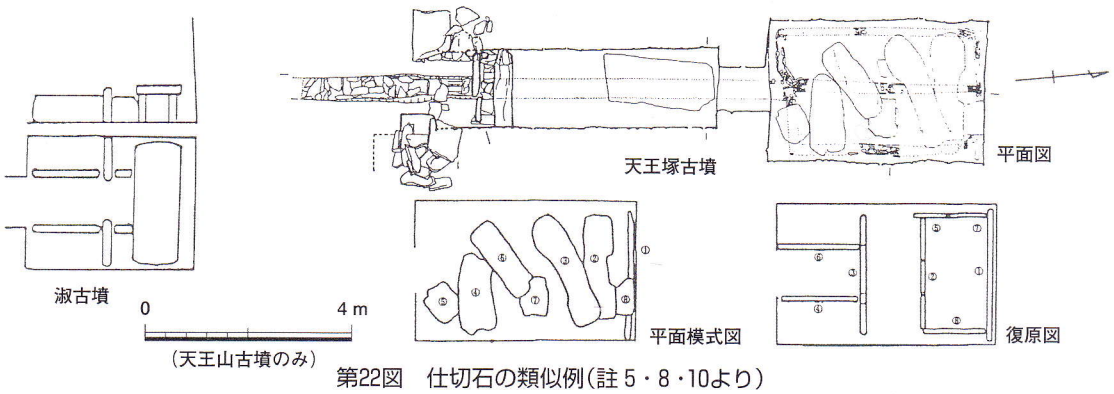


第20図　棺台の類似例（註５・７より）

棺障については大半の石材が抜き取られており、僅かに南側壁にその基部が遺存しているだけであったが、高さ30㎝程度で、やや



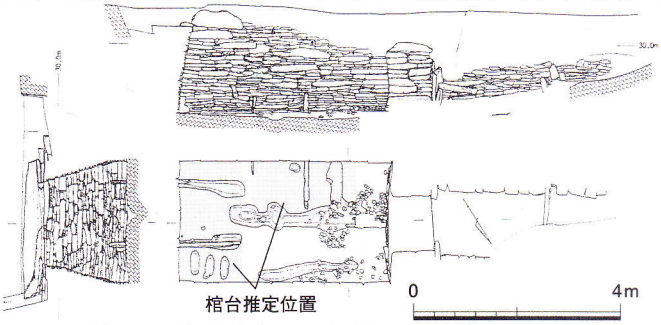
第21図　棺障の類似例（註８より）



第22図　仕切石の類似例（註5・8・10より）

厚みのある板状石材を用いたものとみられ、本来は棺台上面より約10cm程度突出していたと考えられた。棺障の類例としては岩橋千塚古墳群前山B103号墳や和歌山市小倉8号墳、同伊太祈曽神社1号墳、岩出町船戸山2号墳があるが[8]（第21図）、これらはすべて石棚あるいは石棚状の施設を棺台としたものであることから、棺障は本来その付属施設であると判断できる。棺台をもつ横穴式石室は、これら石棚を屍床とする事例と比較して時期的に併行するかやや後出するものであることや、本例のように棺障が棺台と組み合う事例が確認できることから判断して、石棚を屍床とするものから派生した形態である可能性が考えられる。また、奥壁際に何らかの施設によって屍床を形成しているものは、その大半の事例に石棚が併設されており、石棚とその下の屍床によって第一次の埋葬空間を創り出している。このことから、本例についても石棚の存在した蓋然性は極めて高いと言える。

次に仕切石については、玄室中央部において主軸に平行して左右1組で構成されたとみられる結晶片岩の板状石材を用いた仕切り石が検出された。和歌山県内の横穴式石室において仕切石が設置される場合、通例は主軸に直交するものが大半であり、平行する事例としては岩橋千塚古墳群内の天王塚古墳や有田市淑古墳においてその可能性が示されている。淑古墳は明治年間に宮内省に提出された報告書の絵図からその存在が知られるもので、奥壁際に組み合わせ式石棺を置き、その前面を板状石材によって大きく六区画に仕切るものと推定されており[9]（第22図）、甲冑などの副葬品を置く間仕切りの用途とみられる。天王塚古墳は玄室内に板石が散乱した状態で発見されており、松下彰氏によって奥壁際に組み合わせ式石棺を置き、その前面を板状石材によって仕切る構造であったことが復原されている[10]（第22図）。上記2例に対し、本例は発掘調査によって原位置を保った状態で検出された唯一の例として貴重であり、岩盤直上から据え付けられていること、石室自体が岩盤を掘り残して基底石としているなど、墓坑掘削時から極めて計画的に築造されていることから、追葬時に敷設したものではなく、構築当初から存在したものと考えられる。また、仕切石の用途としては棺の間仕切りであった可能性が考えられ、仕切り石間の幅約50cmを通路とし、主軸直交葬1棺と主軸平行葬2棺が当初から計画されていたものと想定される。岩橋系の横穴式石室においては主軸直交葬が基本であり、主軸直交葬と平行葬が併存する複数葬の事例は、棺台支石からその可能性が想定される山東22号墳（第23図）など極少数である。岩橋千塚古墳群内ではその多くが盗掘によって埋葬状態が撹乱されていることや、岩橋系の横穴式石室では釘付式



第23図　主軸直交・平行葬の併存例（註6より）

(11)
木棺が一般的ではないという指摘があるように鉄釘の出土が少ないことから、棺体配置の検討が充分進んでおらず、本例は玄室内の諸施設から棺体配置の推察を行える事例として注目できる。

以上、1号墳横穴式石室の構造の内、玄室内部の施設については棺台の出現と石棚を屍床とする石室との関連や、岩橋系横穴式石室における棺体配置の問題などを考える上で、多くの検討材料を提供する事例であると言える。

註

(1)田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
(2)この例として寺山古墳群があり、渡来系集団との関連が想定されている。
(3)前田敬彦「岩橋型横穴式石室の一特質－玄室内の埋葬形態を中心として－」『兎原』芦屋郷土資料室OB会　1988年、黒石哲夫「近畿の横穴式石室論・和歌山県」『横穴式石室を考える』帝塚山考古学研究所　1990年、中司照世「岩橋型横穴式石室について－後期前半の首長墳を中心に－」『紀伊考古学研究』第6号　2003年
(4)第19図は、岩橋千塚古墳群において玄室の平面規模が明らかな古墳170基を対象に作成したものである。作成にあたっては、以下の文献に拠った。末永雅雄編『岩橋千塚』和歌山市教育委員会　1967年、『紀伊風土記の丘年報』第3号　和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所　1976年、『和歌山県史』考古資料編　和歌山県教育委員会　1983年、大野嶺夫「岩橋千塚と周辺T字形横穴式石室(上)」『古代学研究』第109号　古代学研究会　1985年、前田敬彦「寺内古墳群確認調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』3　財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1996年、『岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書』和歌山県教育委員会　2000年、『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成14年』和歌山県教育委員会　2004年。
(5)末永雅雄編『岩橋千塚』和歌山市教育委員会　1967年
(6)『山東22号古墳』(財)和歌山県文化財センター　1992年
(7)樋口隆康他「和歌山市鳴滝古墳群の調査」『和歌山県文化財学術調査報告』第2冊　和歌山県教育委員会　1967年
(8)松下彰「岩橋千塚の理解によせて」『求真能道』　歴文堂書房　1988年、『和歌山県史』考古資料編　和歌山県教育委員会　1983年
(9)松下彰「明治41年和歌山県知事から宮内省大臣提出の淑古墳発見報告書について」『紀伊風土記の丘年報』第17号　和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所　1991年
(10)松下彰「棺座について」『和歌山県史研究』第12号　和歌山県史編さん委員会　1985年
(11)広瀬和雄「紀伊岩橋千塚古墳群の諸問題」『地域と古文化』　地域と古文化刊行会　2004年

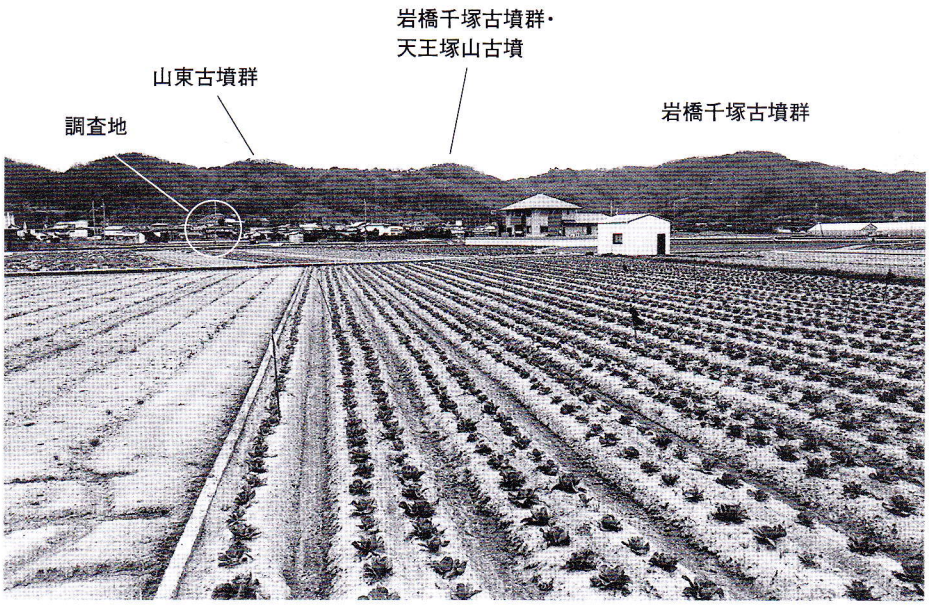
報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはっくつちょうさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成15年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川口修実
編集機関	和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640－8511　和歌山県和歌山市七番丁23　TEL　073－432－0001 〒640－8227　和歌山県和歌山市西汀丁29　TEL　073－435－1195
発行年月日	西暦　2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
わさかみなみがいと 和坂南垣内 こふんぐん 古墳群	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 ねぎ 禰宜	3020150	428	34° 14′ 24″	135° 15′ 39″	20031205 20040312	6000 54 (発掘調査面積)	崩壊 抑止

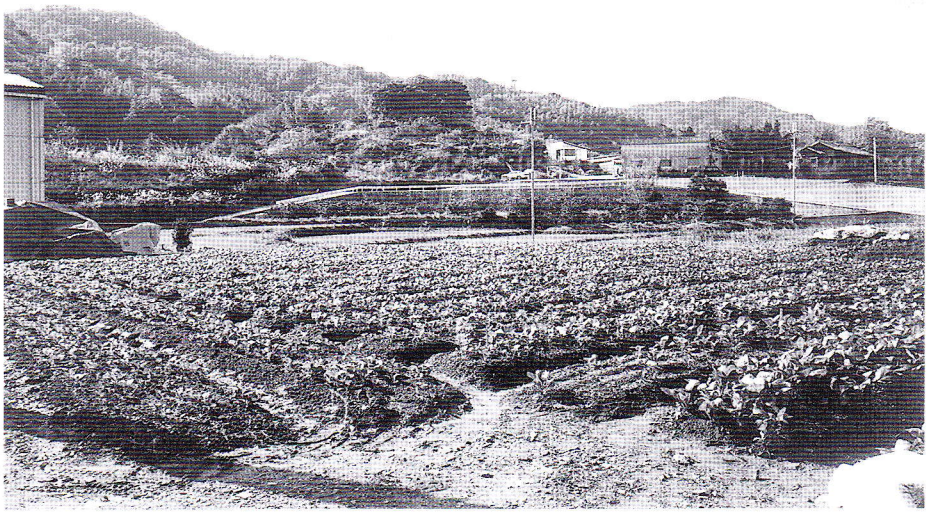
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和坂南垣内 古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室	土師器・須恵器・中世土師器・瓦器・近世陶磁器・瓦・金属製品・ガラス製品	1号墳横穴式石室は、棺台・棺障・仕切石をもち、仕切石は玄室の主軸に平行する県内では稀少な例である。

図　　版



和坂南垣内古墳群遠景
（北から）

和坂南垣内古墳群遠景
（東から）



調査前の古墳群近景
（北東から）

調査前の古墳群近景
（南西から）

1号墳調査前の状況
（南から）

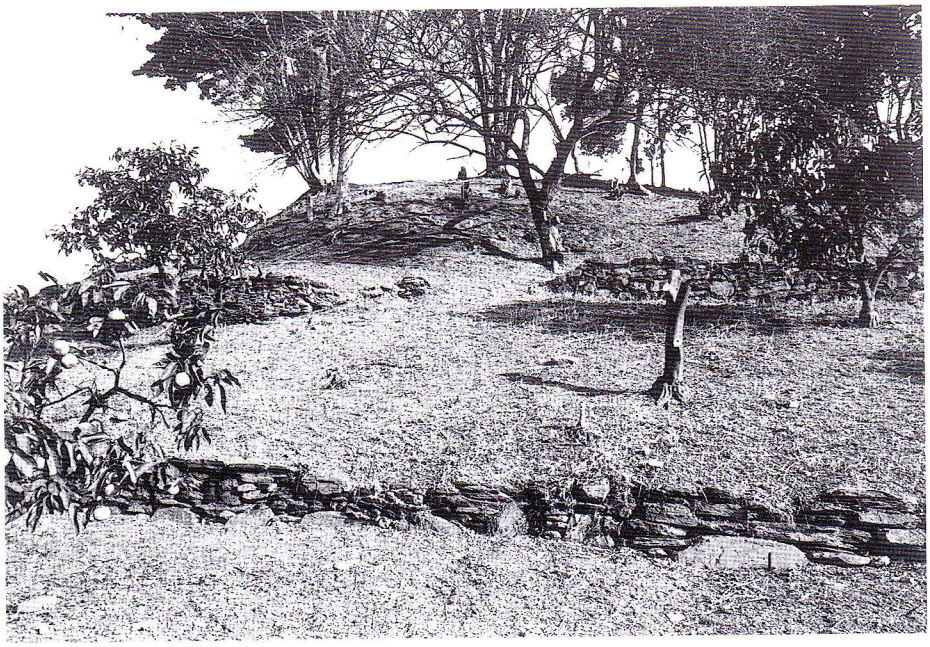
3号墳調査前の状況
（北から）

樹木伐採後の古墳群近景（北東から）

樹木伐採後の古墳群近景（南西から）

1・2号墳
（南西から）

1号墳
（北から）

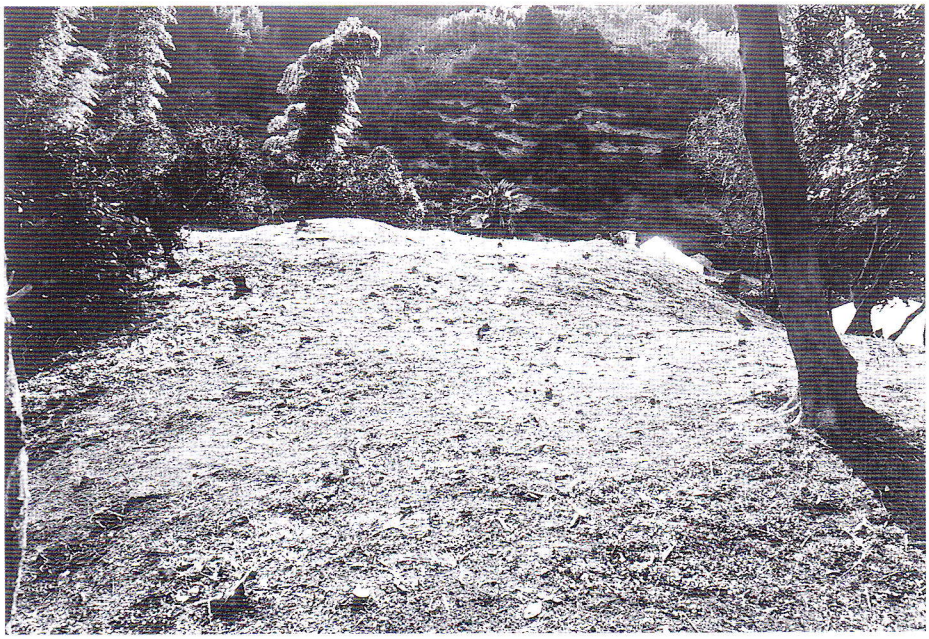


1号墳
（西から）

図版5　遺構

1号墳墳頂部
（南から）

2号墳から1号墳を望む
（南から）



1号墳から2号墳を望む
（北から）

図版6　遺構

2号墳墳頂部
（北東から）

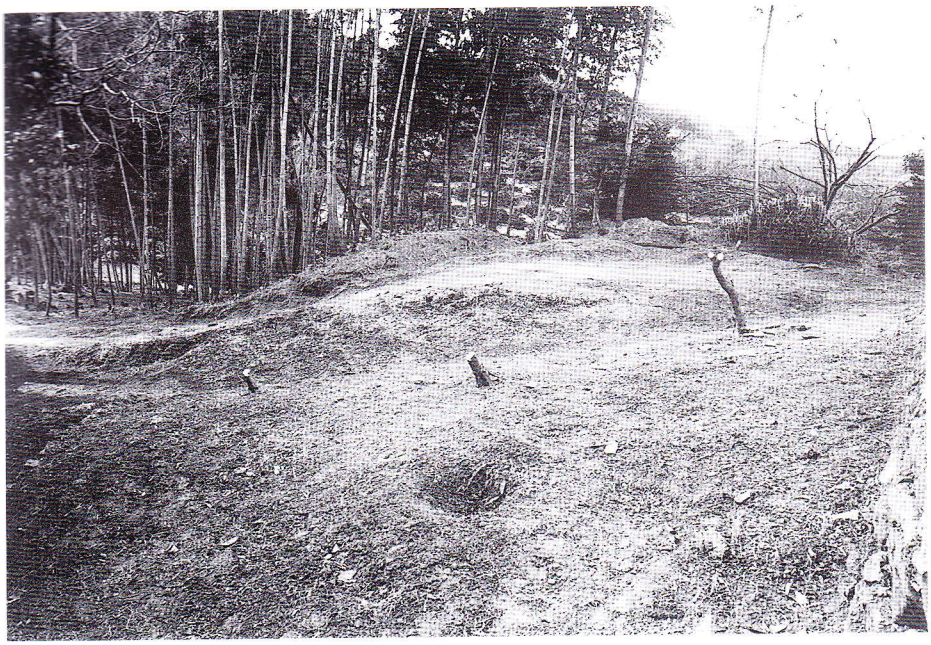
2号墳
（西から）

2号墳
（南西から）

図版7　遺構

3・4号墳（北から）

3・4号墳（南から）



3号墳
（東から）

4号墳
（北東から）

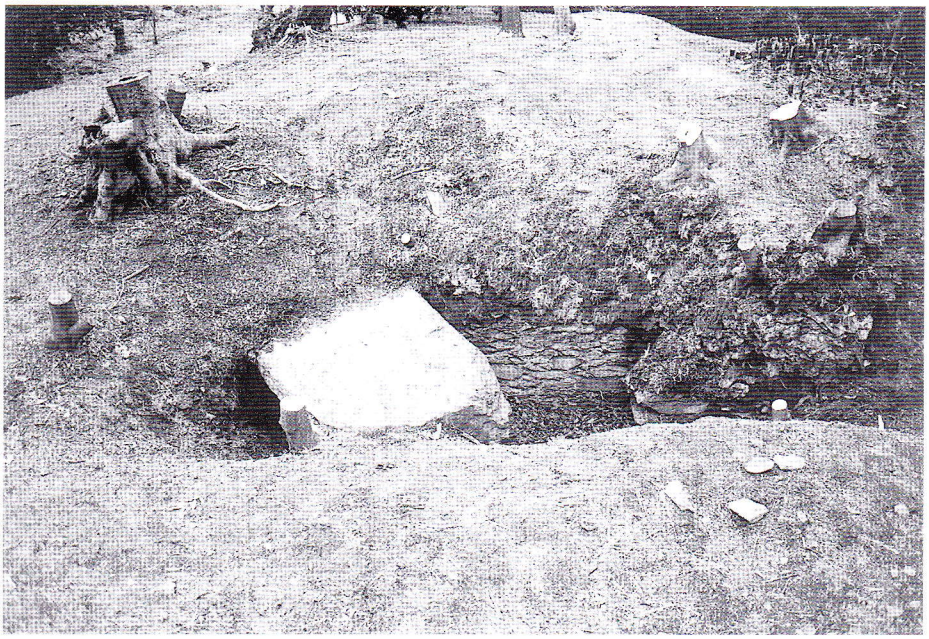
4号墳
（南西から）

第１区調査前の状況
（西から）

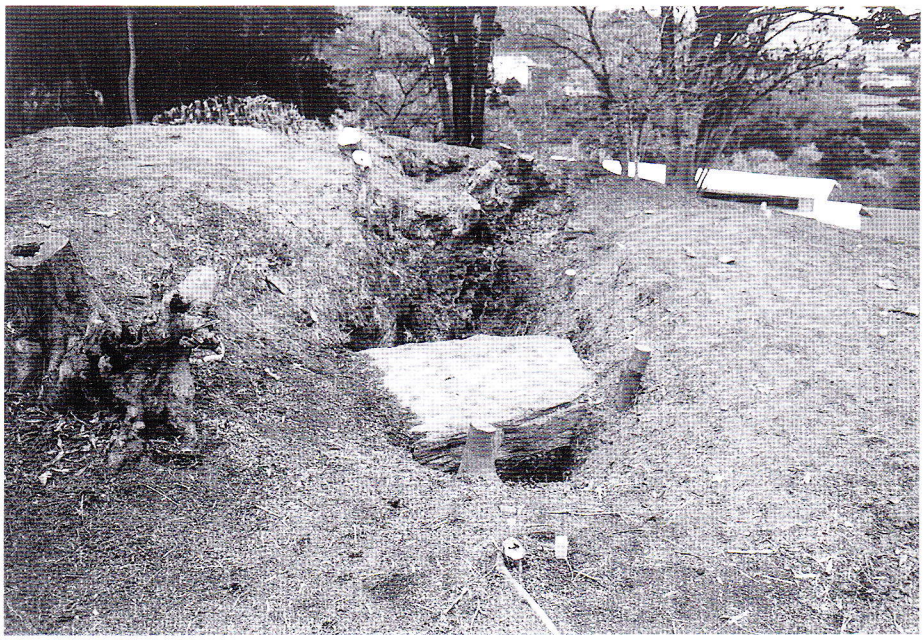
第１区樹木伐採後の状況
（西から）

第１区横穴式石室上部の巨石
（西から）

図版10　遺構



第１区樹木伐採後の状況
（北から）

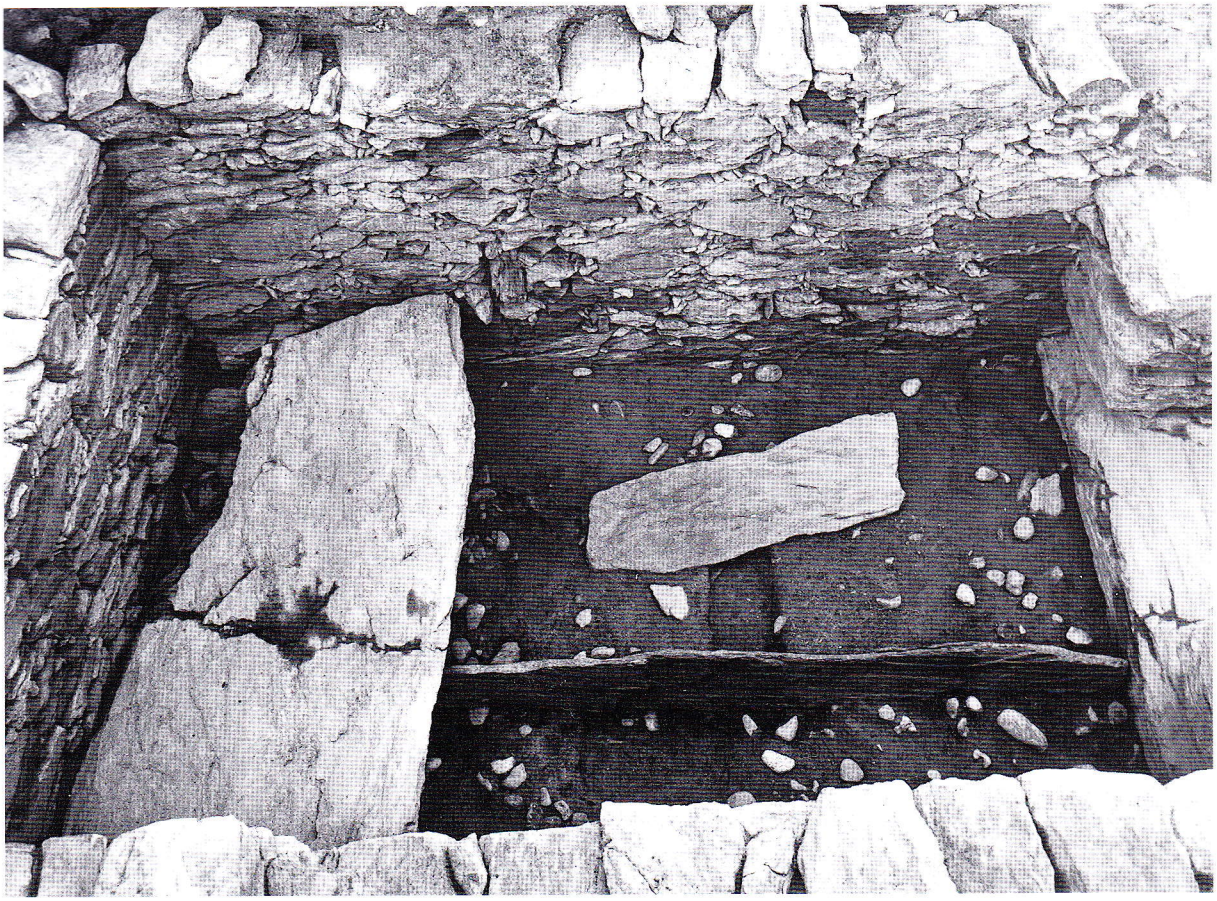


第１区樹木伐採後の状況
（東から）

第１区巨石撤去後の状況
（東から）

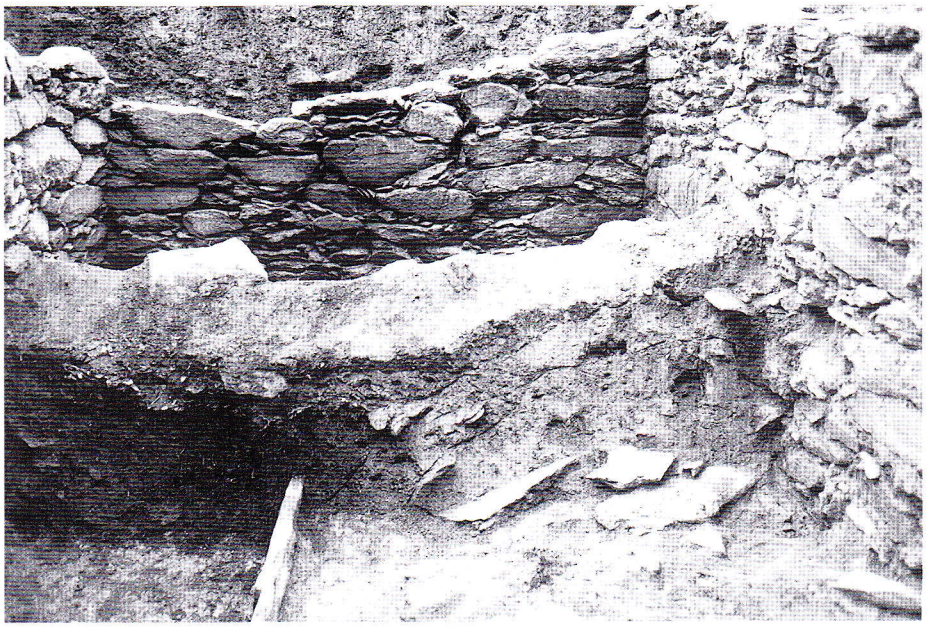
第１区全景（西から）

第１区全景（東から）



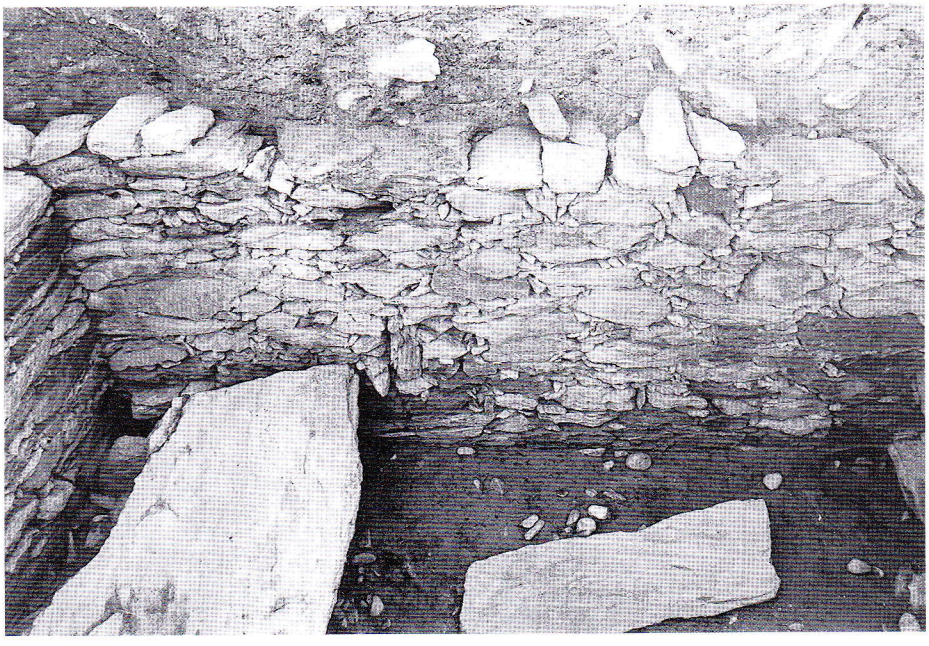
第1区横穴式石室 玄室(北から)

第1区横穴式石室 奥壁・棺台(西から)

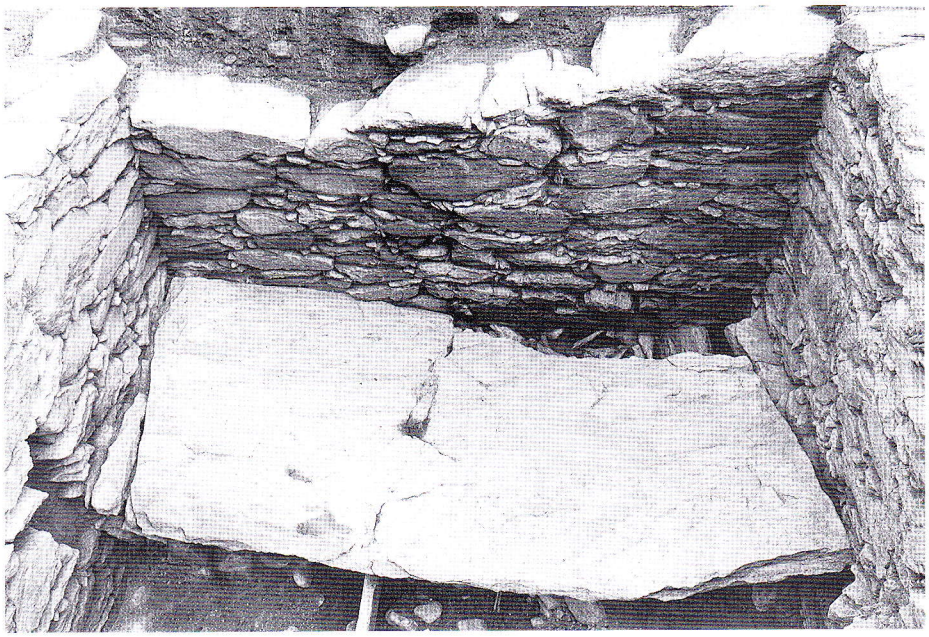


第１区横穴式石室
玄室土層堆積状況
（西から）

第１区横穴式石室
玄室北側壁
（南から）



第１区横穴式石室
玄室南側壁
（北から）



第1区横穴式石室
棺台
（西から）

第1区横穴式石室
玄室南側壁棺障基部
（北から）

第1区横穴式石室
玄室床面断割り状況
（西から）

第１区横穴式石室
玄室排水溝
（東から）

第１区横穴式石室
玄室床面の円礫
（東から）

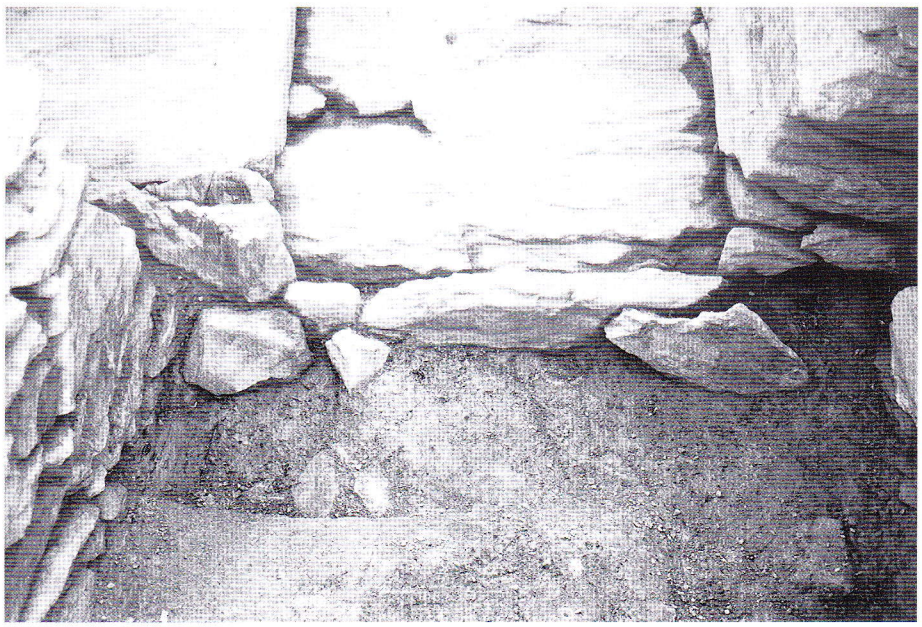
第１区横穴式石室
玄室北側壁基底石の状況
（南から）

第１区横穴式石室 玄室から羨道部を望む（東から）

第１区横穴式石室 玄室前道部（西から）

第１区横穴式石室
玄室前道部土層堆積状況
（南から）

第１区横穴式石室
玄室前道部南側壁
（北から）



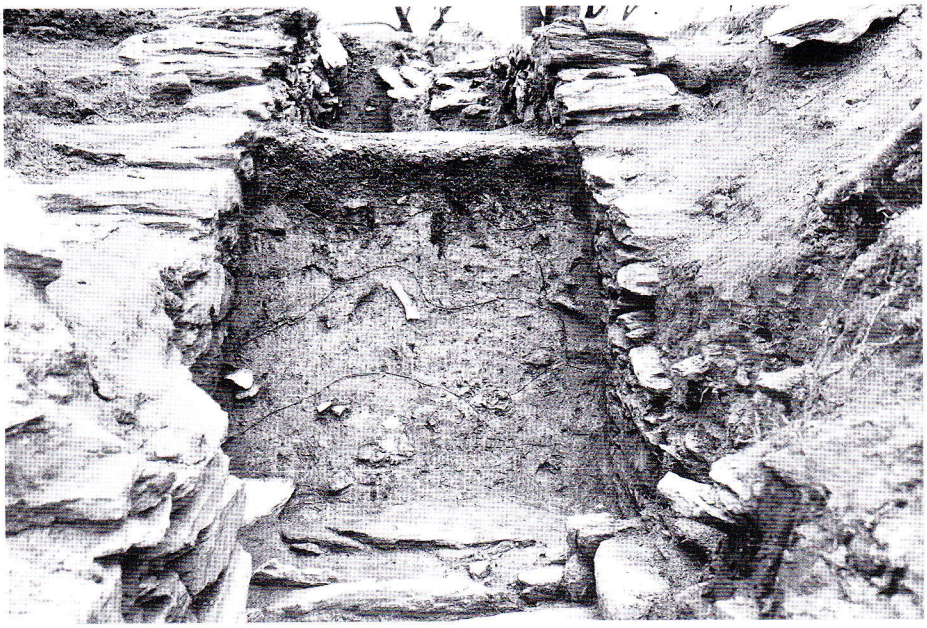
第１区横穴式石室
玄室前道部閉塞石
（西から）

第１区横穴式石室 羨道部（東から）

第１区横穴式石室 羨道部・墓道（東から）

第１区横穴式石室 羨道部・羨門部北側壁（南から）

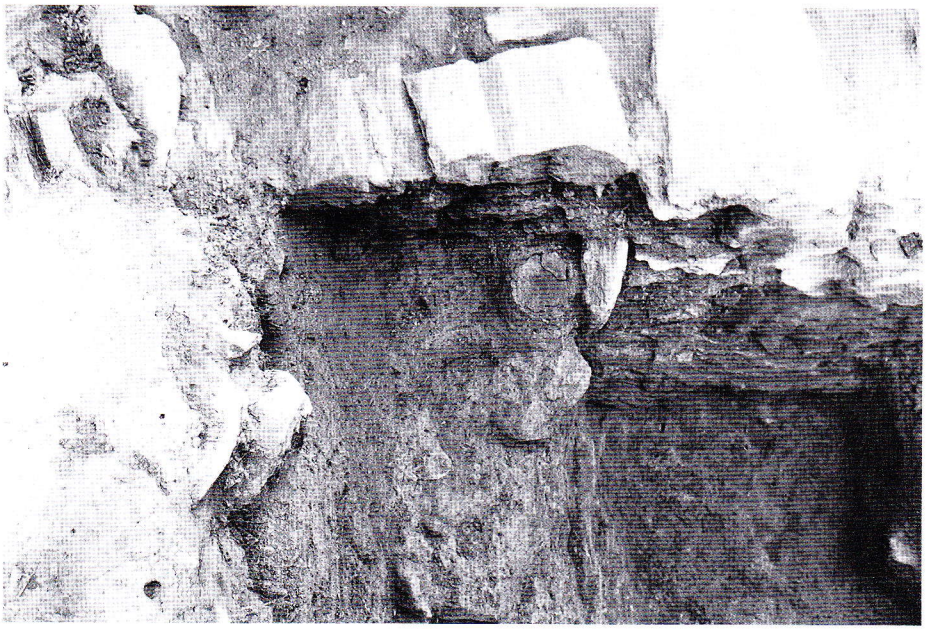
第１区横穴式石室 羨道部・羨門部南側壁（北から）



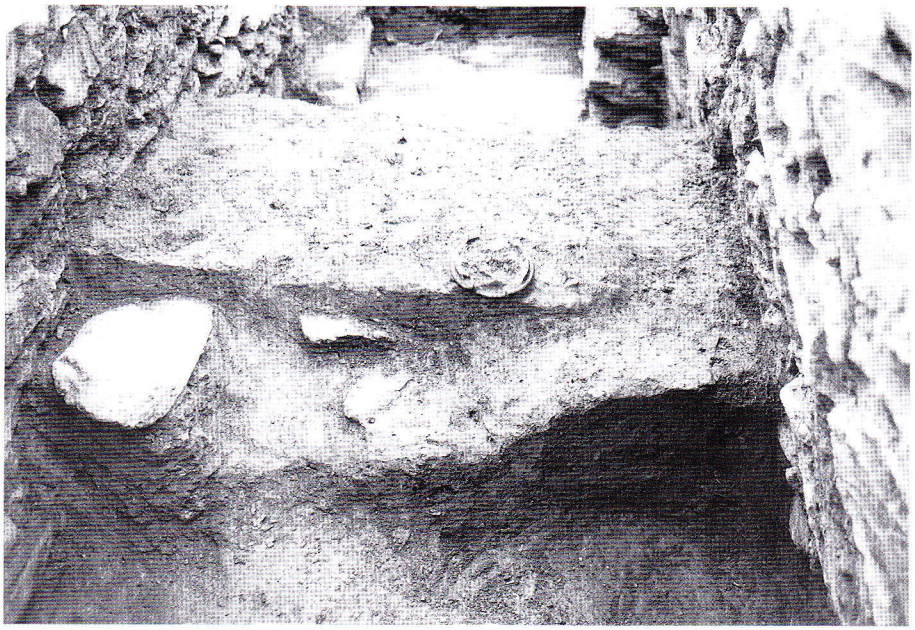
第１区横穴式石室
羨道部土層堆積状況
（東から）

第１区横穴式石室
羨門部土層堆積状況
（西から）

第１区横穴式石室
羨道部遺物出土状況
（西から）



第１区横穴式石室
羨道部遺物出土状況
（南から）



第１区横穴式石室
羨道部遺物出土状況
（西から）

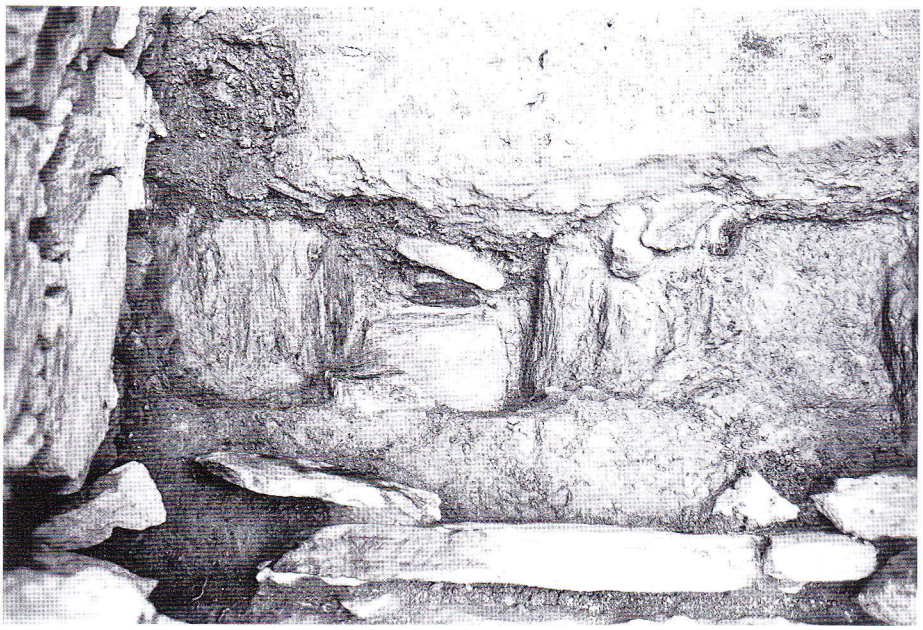
第１区横穴式石室
羨道部北側壁
（南東から）

第１区横穴式石室
羨道部南側壁
（北東から）

第１区横穴式石室
羨門部北側壁
（南から）

第１区横穴式石室
羨門部南側壁
（北から）

第１区横穴式石室
羨道部閉塞石
（南から）



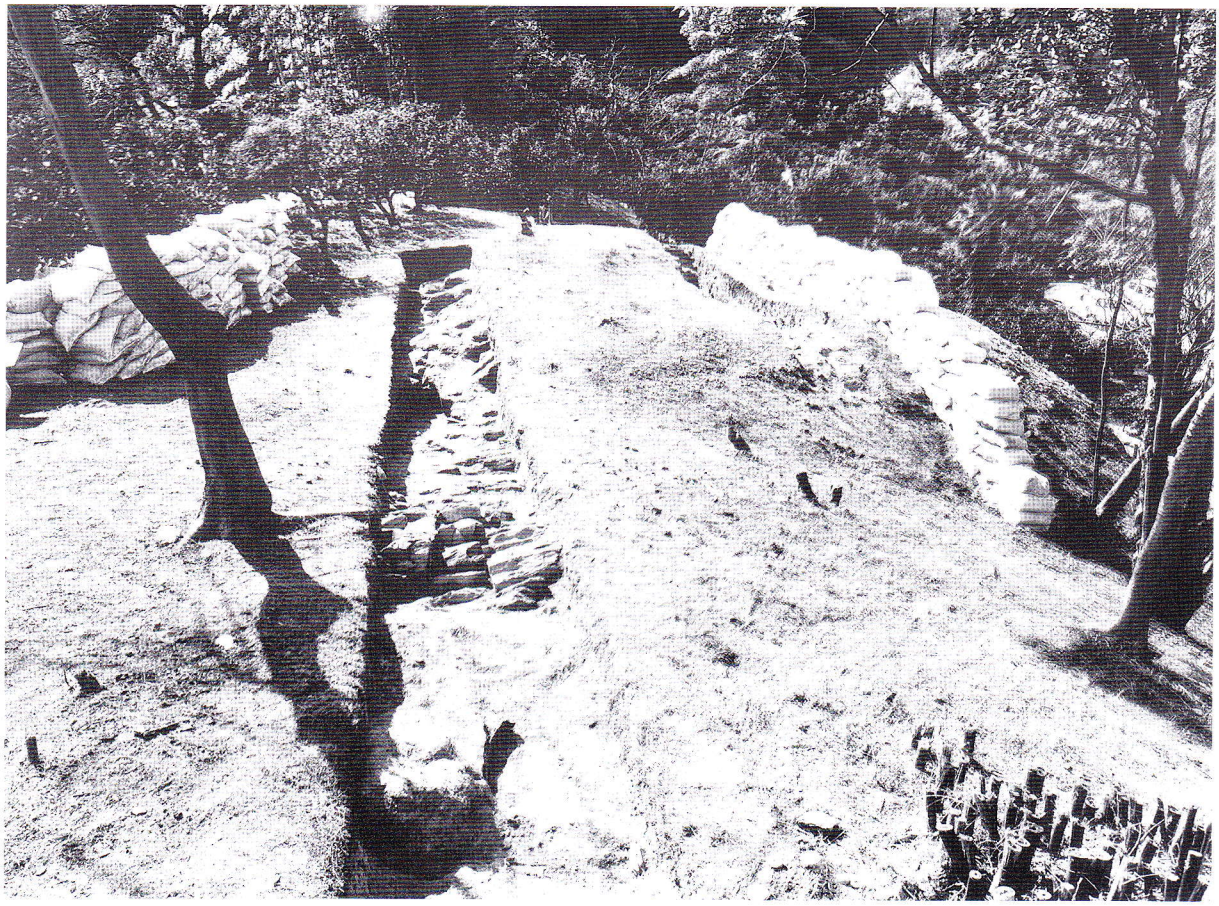
第１区横穴式石室
羨道部床面断割り状況・
排水溝（東から）

第１区横穴式石室
羨道部北側壁基底石の状況
（南から）

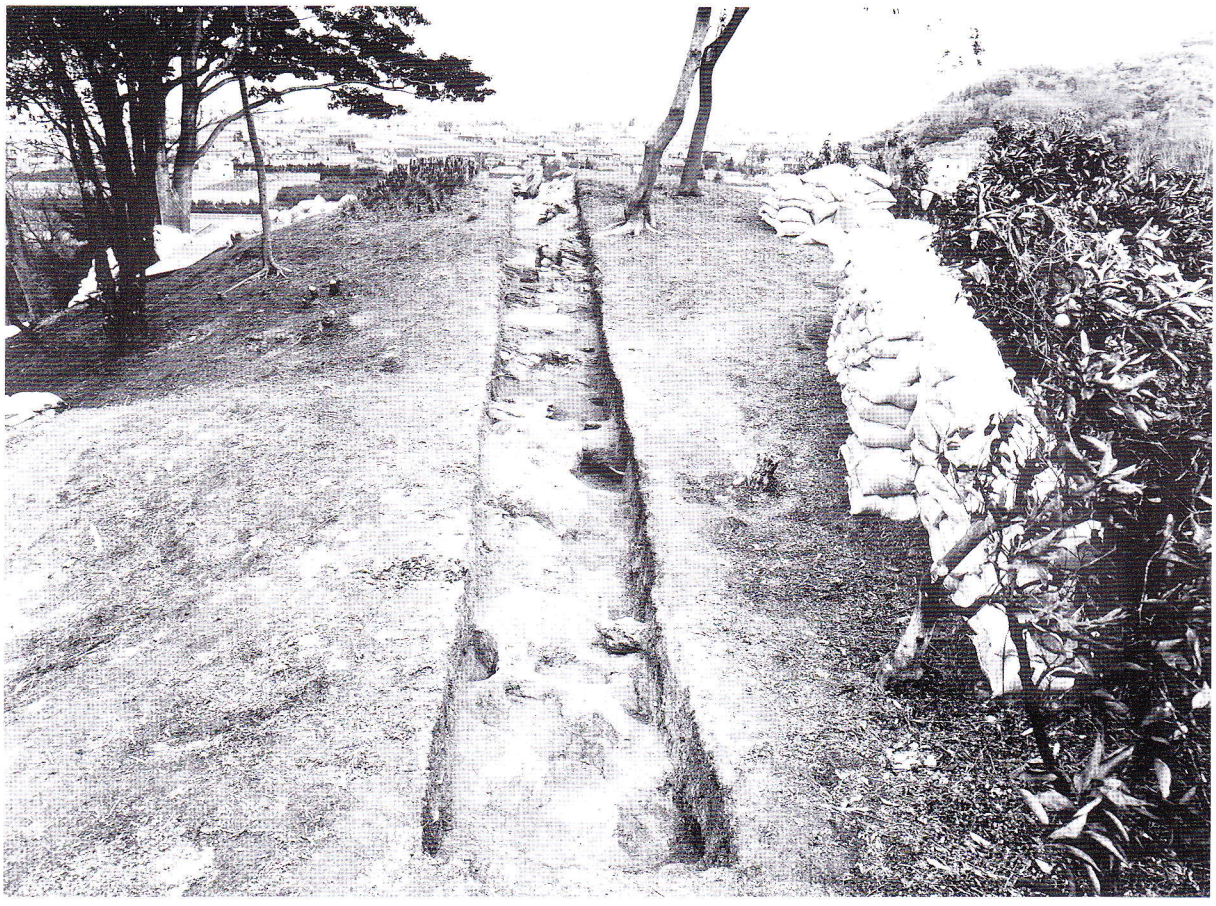
第1区横穴式石室
墓道検出状況
（西から）

第1区横穴式石室
墓道検出状況
（南から）

第1区横穴式石室
墓道
（東から）

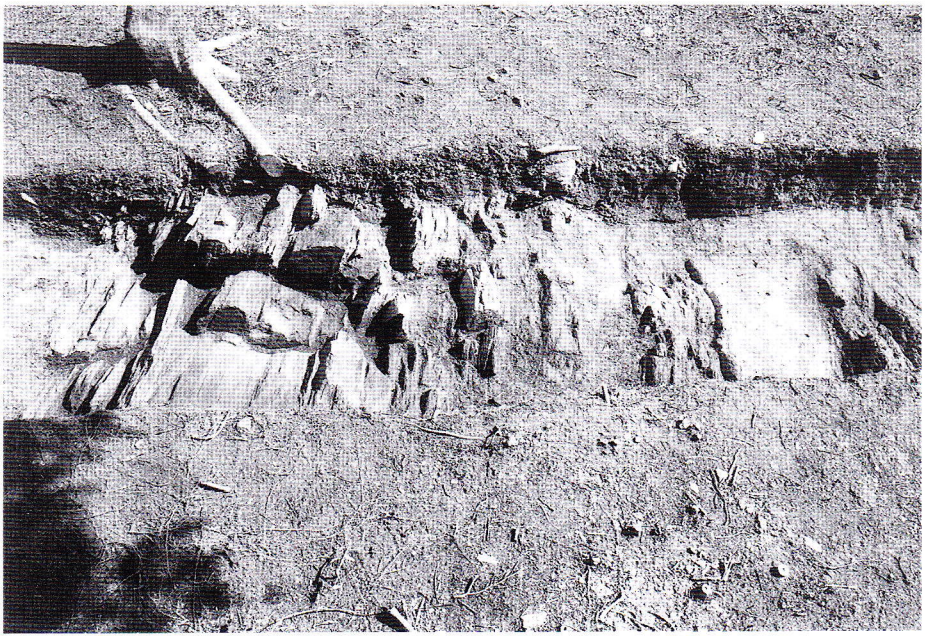


第２区全景（北から）

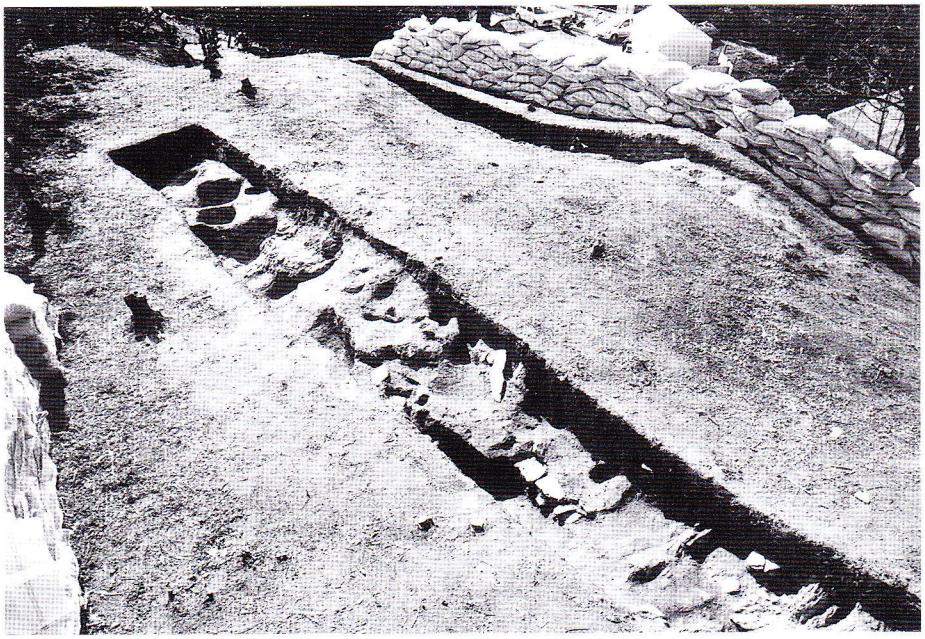


第２区全景（南から）

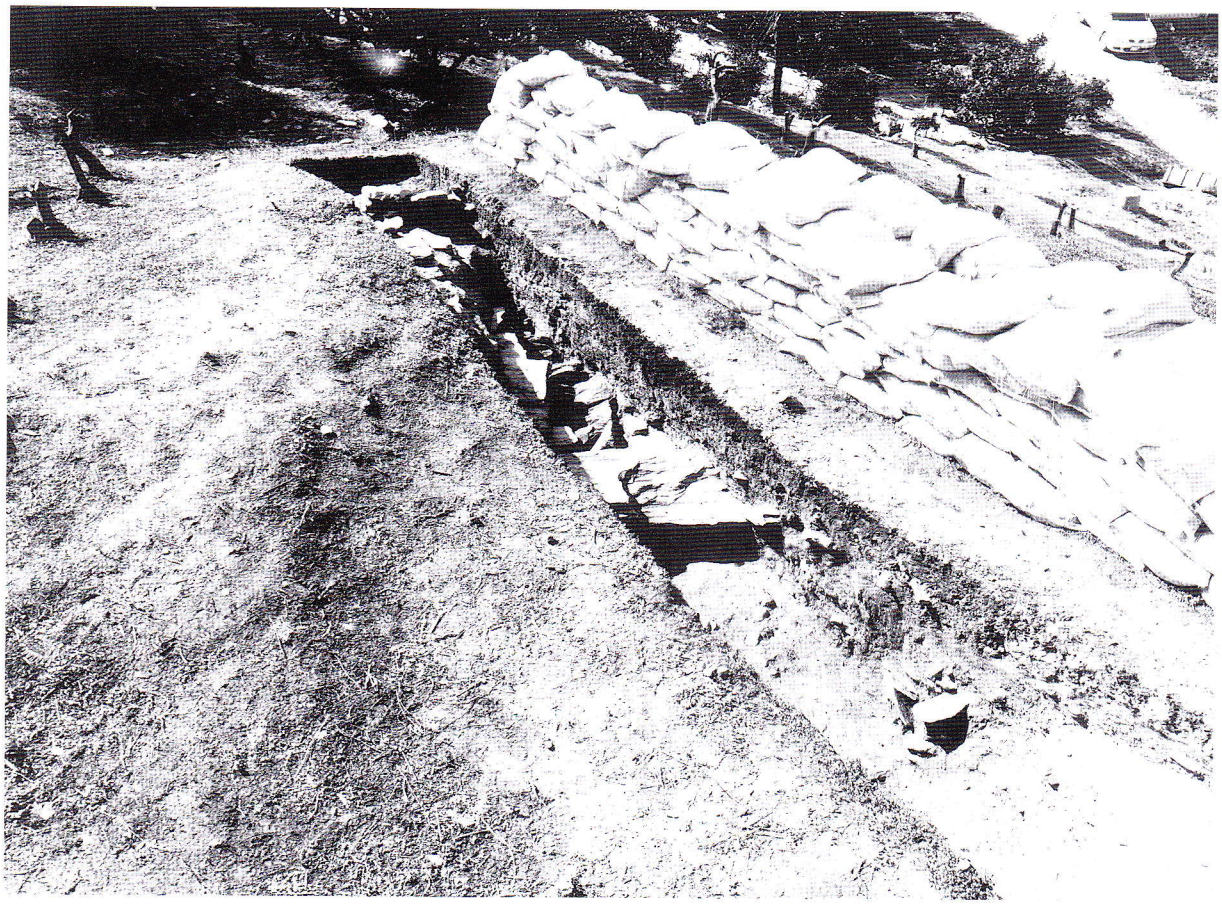
第２区１号墳墳丘検出状況
（西から）



第２区１号墳墳丘・
岩盤検出状況（西から）



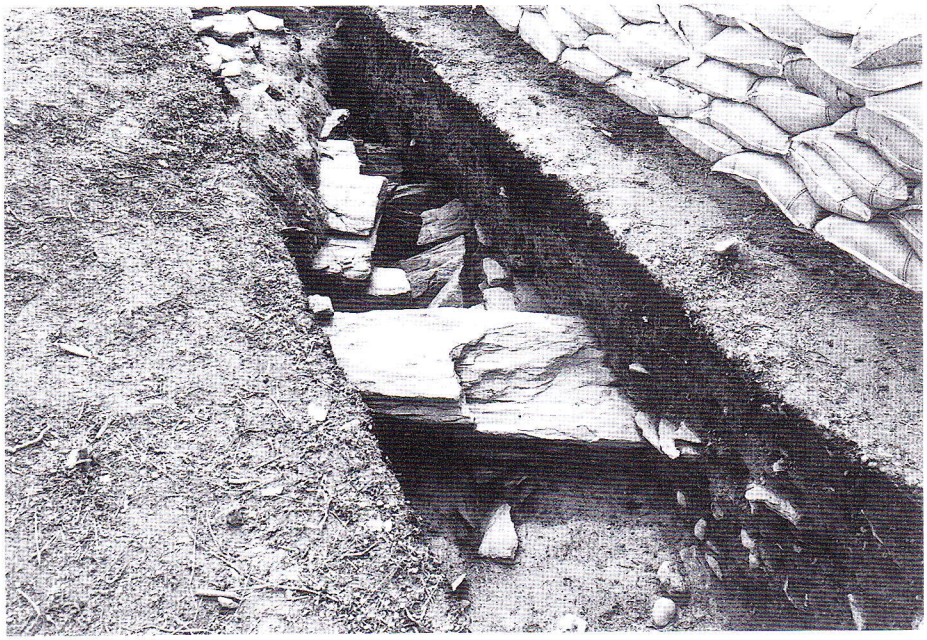
第２区２号墳墳丘検出状況
（北東から）



第3区全景（北東から）

第3区全景（南から）

第3区横穴式石室 検出状況
（南西から）



第3区横穴式石室 検出状況
（北東から）

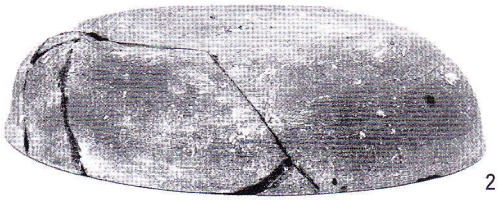
第3区横穴式石室
玄室前道基石・玄室床面
（南東から）

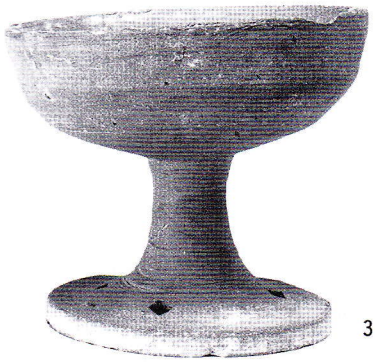
第3区横穴式石室
羨道部東側壁・岩盤検出状況
（北西から）

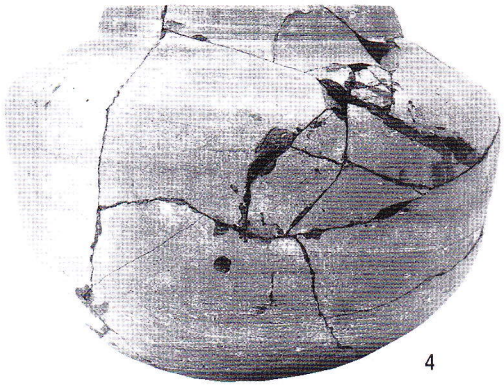
第3区土層堆積状況1
（西から）

第3区土層堆積状況2
（西から）

1


2

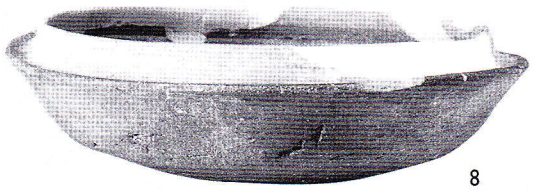

3

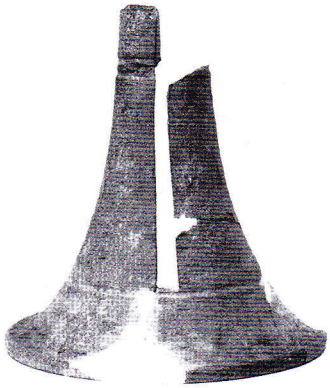

4

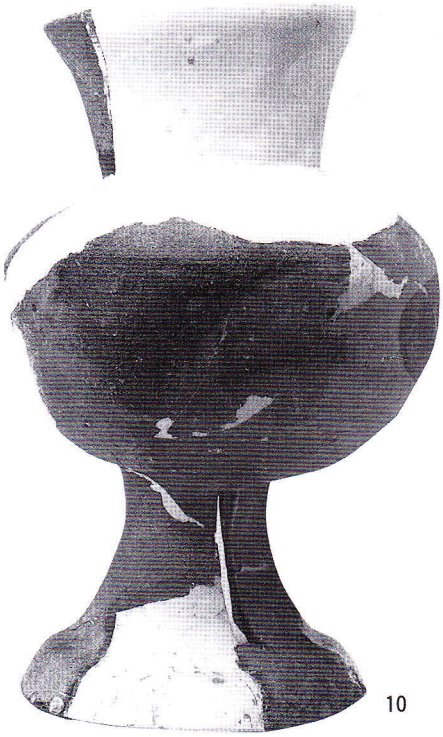
5

6

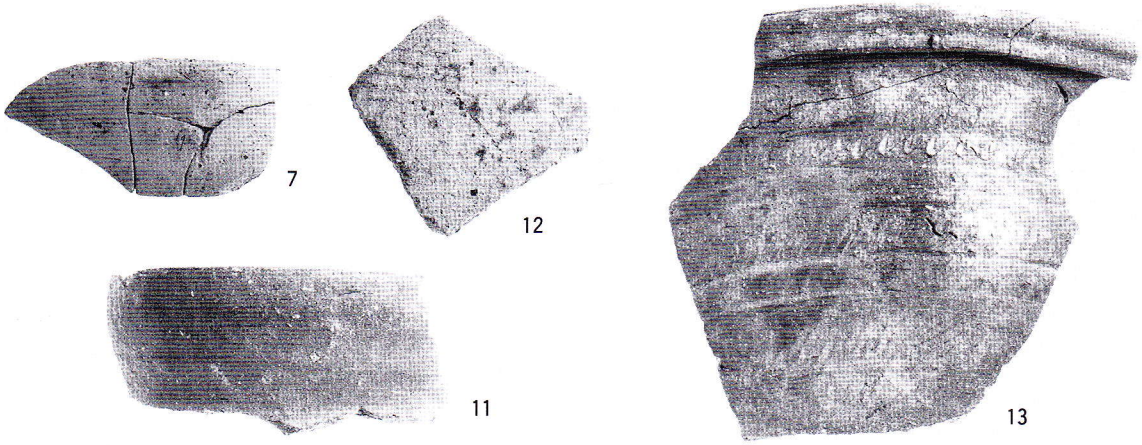
1号墳既出土遺物　土師器1高杯、須恵器2杯蓋・3高杯・4～6短頸壺


8

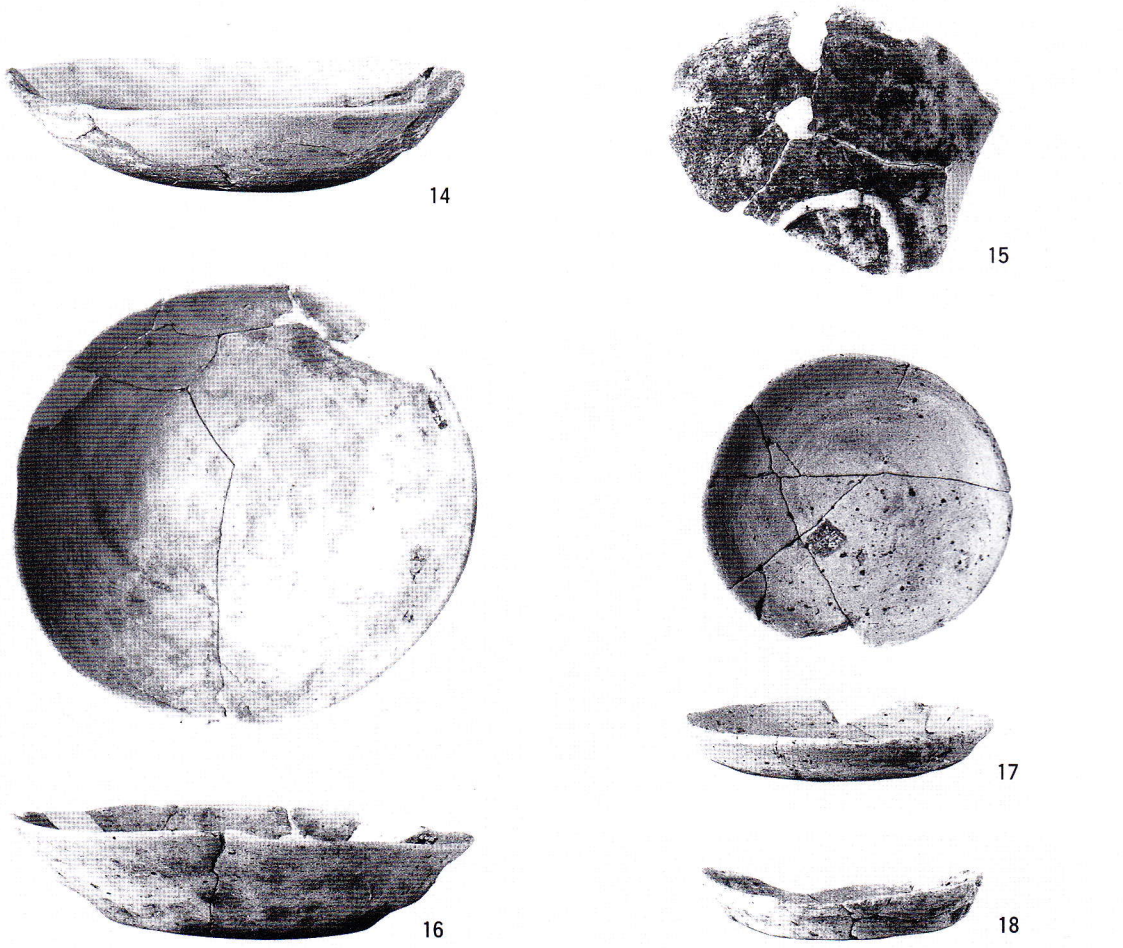

9


10

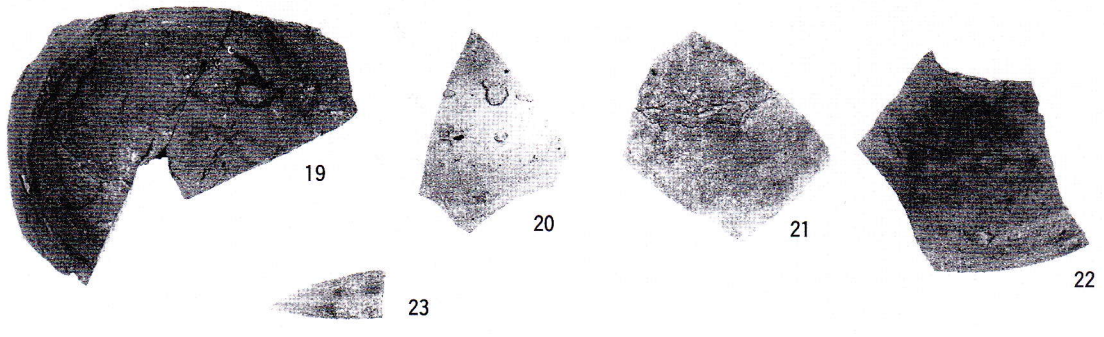
1号墳(第1区)出土遺物　須恵器8杯身・9高杯脚部・10脚付壺



1号墳(第1区)出土遺物　須恵器7杯蓋・11短頸壺・12甕・13器台

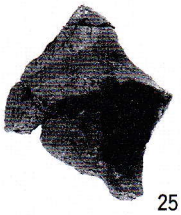


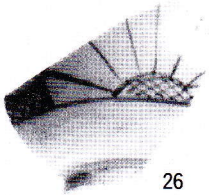
1号墳(第1区)出土遺物　土師器14皿、瓦器15・16椀、17・18皿



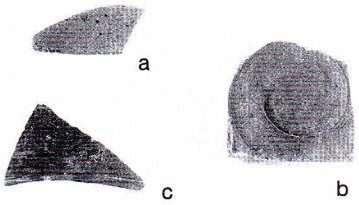
2号墳(第3区)出土遺物　須恵器19～22杯蓋・23高杯脚部

図版32 遺物

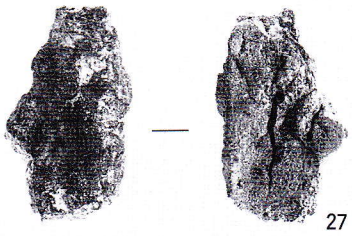




2号墳(第3区)出土遺物　土師器24・25椀、肥前系磁器26染付碗

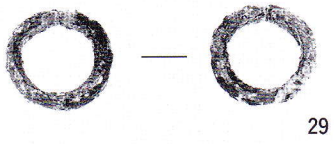


2・3号墳出土遺物 須恵器 a·b杯蓋、c壺

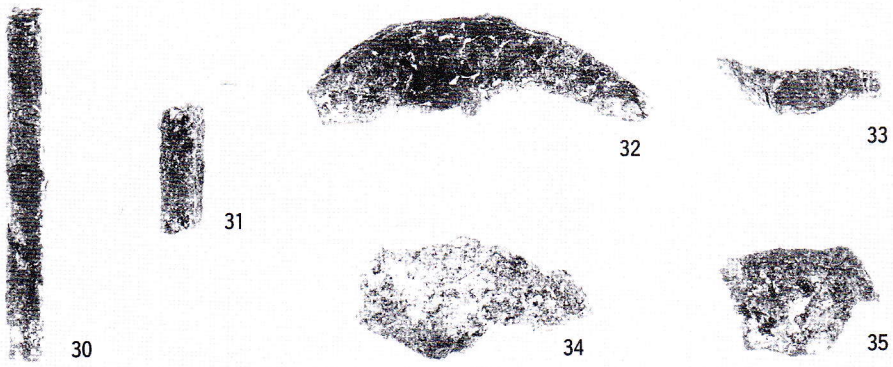


1号墳(第1区)出土遺物　27フイゴ羽口

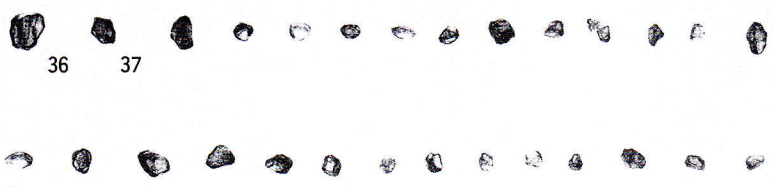
表採遺物　土製品28円板状転用品



1号墳(第1区)出土遺物　金属製品29耳環



1号墳(第1区)出土遺物　金属製品30・31鉄鏃茎部、32刀子、33ノミ、34・35用途不明品



1号墳(第1区)出土遺物　ガラス製品36・37他　ガラス玉

平成17年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成15年度 —

編　集　(財)和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29
発　行　和歌山市教育委員会
和歌山市七番丁23
印　刷　株式会社　髙木プリント

© 和歌山市教育委員会　2005